

奈良県農業研究開発センター 業 務 年 報

令和 7 年度

目 次

I 試験研究部門の成績概要

新たな奈良県農業の取組を支える研究推進事業	1
第3期中期運営方針研究推進事業	2
シーズ創出型研究開発事業(現場対応型研究開発事業)	10
シーズ創出型研究開発事業(種苗育成・供給事業)	15
産学官連携研究事業	17
みどりの食料システム基本計画推進事業	20

II 成果の公表

1. 普及に移す技術課題および普及・行政・教育の参考となる技術情報	21
2. 農業研究開発センター成果発表会	22
3. 刊行物	23
4. 知的財産権の保有状況	25
5. 学会・研究会誌への投稿等	26
6. 学会・研究会、シンポジウム等での発表・講演	27
7. 著書・雑誌・新聞・資料等への掲載、イベント展示、報道発表、 テレビ・ラジオ報道	31
8. 令和7年度 奈良県農業研究開発センター研究評価委員会 評価結果	33
9. 共同研究・受託研究(外部資金研究)・委託研究の実施状況	37

III 職員の受賞

IV センター主催の会議・研修会・講習会

V 講習会・研修会での講師活動

VI 研究交流

VII 視察・見学の受け入れ

VIII 一般報告

1. 所在地と規模	45
3. 機構	45
4. 職員数	46
5. 業務分担	46

IX 気象表(本所[桜井市])

I 試験研究部門の成績概要

新たな奈良県農業の取組を支える研究推進事業

1. 新たな奈良県農業の取組を支える

- 1) 試験課題：長距離輸送性を高めるイチゴ品質保持技術の開発
目 的：県育成イチゴ品種の長距離輸送性を高める。

細目課題(試験年次)	内 容 (イ) 目的 (ロ) 調査項目 (ハ) 処理区または手法 (ニ) 結果
1. 輸送時の果実損傷評価 (R6～R8) 1) 画像解析によるオセ・スレの定量評価手法を検討	イ. 果皮のオセ・スレ面積を定量化する。 ロ. オセ・スレ面積 ハ. 画像検出、瘦果数による目視評価 ニ. 果実損傷の評価について深層学習を用いて画像から損傷部を定量することができた。
2. 長距離輸送に向けた品質保持技術の確立 (R6～R10)	イ. 品温がオセ・スレの発生に及ぼす影響を検討する。 ロ. オセ・スレの発生面積 ハ. 振動試験 品種：古都華、果実熟度：完熟 品温(10℃3h、20℃3h) ニ. 包装容器のオモテ面では、品温を変えてもオセ発生面積は変わらなかった。ウラ(底)面では、オセ発生割合が1℃で5.5%、10℃で14.0%、20℃で14.2%となり、1℃では他2水準と比べて有意に発生割合が低くなったが、10℃と20℃間では差がみられなかった。
3. 需要に応える有望系統の育成 (R6～R10)	イ. 品温が果実特性に及ぼす影響を明らかにする。 ロ. クリープメータ：果皮硬度、果肉硬度、貫入変形量、見かけ弾性率 ハ. 4処理区(1℃、5℃、10℃) ニ. 1℃区、5℃区および10℃区において、それぞれ果皮硬度は0.86N、0.82N、0.79N、果肉硬度は0.23N、0.18N、0.16N、見かけ弾性率は2.53MPa、2.52MPa、2.22MPaであった。収穫直後に品温を下げることで、果皮・果肉硬度および見かけ弾性率が高く維持されることが分かった。
	イ. 各果実特性に秀でた系統を蓄積する。 ロ. 生育特性、果実品質 ハ. 輸送性に優れる系統およびその他の果実特性を持つ系統の選抜 自殖系統(S1:30系統、S2:20系統、S3:10系統)を選抜 ニ. 新たにS1系統を10系統、S2系統を11系統、S3系統を11系統作出した。S2およびS3系統は、‘古都華’ ‘ならあかり’由来の系統が多いが、S1系統は遺伝的多様性を目的に、他県品種やF1系統を元に作出した。

2) 試験課題：一番茶生産に特化した有機栽培体系の確立

- 目 的：病害虫の発生が他の茶期と比べると少なく、販売単価もよく、コストや労力面でも生産者が取り組みやすい
一番茶に特化した有機栽培を行う。

細目課題(試験年次)	内 容 (イ) 目的 (ロ) 調査項目 (ハ) 処理区または手法 (ニ) 結果
1. 病害虫管理体系の確立 (R6～R10)	イ. 有機栽培茶園で問題となる病害虫の解明 ロ. 病害虫の発生状況調査 ハ. 有機栽培茶園および慣行栽培茶園でのたたき落とし、黄色粘着板、茶樹に発生する病害虫の見取り調査 ニ. 有機転換2年目茶園では1年目と比較してチャノミドリヒメヨコバイ(たたき落とし調査法)、チャノキイロアザミウマ(たたき落とし調査法)、カンザワハダニ(寄生葉率調査)が増加する傾向が確認された。その他病害虫の発生は茶園ごとに異なり明確な傾向は確認されなかった。
2. [新]一番茶摘採後の最適な管理方法の確立 (R7～R10)	イ. 一番茶摘採後の最適な剪枝時期の検討 ロ. 剪枝後の新芽生育調査、秋整枝量調査、翌年度の一番茶収量調査、剪枝後の病害虫発生状況調査 ハ. 大和茶研究センター内10号園 剪枝時期の変更(5月下旬、6月中旬、7月上旬、7月下旬) ニ. 7月以降に剪枝を行うことでチャノミドリヒメヨコバイ及びチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類の発生数を抑制することができた。二番茶摘採位置より5cm上で秋整枝を行ったところ、秋整枝量は剪枝後の生育期間に比例して増加する傾向であった。

3) 試験課題：枝物の短期育苗技術と品質保持技術の開発

目 的：海外需要が急増するアセビの栽培化に取り組む。また、スモークツリー等海外向き品目の産地での早期普及と輸出振興のため、増殖技術の確立と品質保持技術を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. アセビ短期育苗技術の開発 (R6～R10)	イ. 効率的な挿し木および育苗方法の検討 ロ. 発根率、成長量 ハ. 育苗方法2、栽培環境3、施肥量3 ニ. 夏季の遮光は75～80%で生育が良い傾向にあった。追肥量が多いと高温期に枯死し、緩効性肥料でN0.2mg/L以下、もしくは月1回の液肥施用が適することを明らかにした。
2. [新]アセビ栽培適地の検討 (R7～R10)	イ. 定植後の生育量調査および好適栽培条件の検討 ロ. 生存株率、成長量 ハ. 定植場所3 ニ. 2年生苗を秋に林床(落葉樹下)に定植し、活着を確認した。常緑樹を模するため、冬季は一部を遮光して、経過観察中である。
3. 輸向向け品目の増殖技術の開発 (R6～R10)	イ. 発根率の向上および品種間差の検討 ロ. 発根率、成苗率
1) 輸向向け品目の増殖技術の開発	ハ. 品種4、発根剤3 ニ. スモークツリーでは、オキシベロン液剤2倍希釈液の10秒浸漬処理で発根率と発根量が良いことを明らかにした。6月30日に流通量の少ない緑色、白色種を挿し木して発根率を調査した結果、63～89%であり、赤系品種と同様に増殖可能と考えられた。
2) 輸向向け品目の品質保持技術の開発	イ. 輸送方法や促成方法の検討 ロ. 落葉数、日持ち日数(アセビ)、開花率、花色(サクラ) ハ. 包装資材3(アセビ)、品質保持剤2(アセビ、サクラ) ニ. 夏季の輸送後のアセビの落葉は高温による乾燥が原因で、湿式輸送もしくは包装資材の利用により抑制できることを明らかにした。サクラでは、促成時に糖を含む品質保持剤を利用することで赤味が強くなることを明らかにした。

第3期中期運営方針研究推進事業

1. 「奈良の食」の魅力を活かす

1) 試験課題：奈良県オリジナル酒米新品種の栽培技術の確立

目 的：品種登録出願予定の酒米新品種(‘なら酒1504’)の特性については未だ十分なデータが得られていないこのため、‘なら酒1504’の現地適応性試験、基礎的データを得るための栽培特性の把握を行い、栽培技術を確認する。このことにより、付加価値の高い、醸造用米生産の拡大を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. ‘なら酒1504’の大規模現地適応性試験 (R6～R7) 協力機関：奈良県酒造組合、奈良県農業協同組合	イ. 有望系統の現地適応性・醸造適性の評価 ロ. 生育特性、収量特性、玄米品質、醸造性(吸水性、醸造歩留まり、アルコール度、酸度、アミノ酸度) ハ. 現地適応性試験(3カ所)、醸造用玄米生産、大規模醸造試験(奈良県酒造組合員) ニ. 合計40.05tの玄米を収穫できた。平均単収52.4kg/a、1等米比率51%、倒伏は見られなかった。紋枯病が発生したが他に病虫害の被害は無かった。醸造会社からは、醸造時の溶解性は悪いが、「品種特性として受け入れているため問題は無い」とのコメントを貰った。
2. ‘なら酒1504’の栽培特性の把握および栽培技術の確立 (R6～R7)	イ. ‘なら酒1504’の施肥特性把握 ロ. 生育特性、収量特性、玄米品質 ハ. ‘なら酒1504’施肥試験 元肥3水準、穂肥3水準、各2反復 ニ. 元肥0.4kg/aに対し、元肥0.7kg/a、1.0kg/aの区は収量が高かった。元肥1.0kg/a、穂肥0.7kg/aの条件で稈長が長くなり、倒伏した。元肥0.7kg/a、穂肥0.3～0.5kg/aの条件で、多収かつ倒伏しにくかった。整粒率は穂肥が増えるにつれ高くなった。千粒重および心白率は施肥量が変わってもほぼ変化しなかった。
3. 系統BまたはCの選抜 (R6～R7)	イ. 有望系統の選抜 ロ. 系統B、系統Cの多肥条件における生育、収量、玄米品質 ハ. 品種特性調査、収量調査、品質調査 ニ. ‘なら酒1504’と比較して系統Bは出穂期が9日、成熟期は13日遅く、稈長は8cm短く、収量はほぼ同等であった。系統Cは出穂期が4日、成熟期は3日遅く、稈長はほぼ同等で収量は10%多かった。系統Bは気温が下がった頃に成熟期間を迎えるため外観品質が良く、心白が小さかった。系統Cの外観は‘なら酒1504’とよく似ていた。

2) 試験課題：県産小麦の生産量増加に向けた栽培管理技術の確立

目 的：県産小麦の生産量増加を目標に、反収増加に向けた栽培技術の確立ならびに産地拡大に役立つ栽培支援ツールを開発する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 安定生産および反収増加に向けた栽培管理技術の確立(R6～R10) 1) 高反収を狙った栽培マニュアルの作成	イ. 穂肥の施用効果の検証 ロ. 稈長、穂長、有効穂数、遅れ穂数、一穂粒数、収量、千粒重、容積重、子実タンパク質含有率 ハ. 基肥2水準(6、8kg-N/10a)×穂肥施用量3水準(0、3、5、7kg-N/10a) 3反復 ニ. 補肥を増量することで収量が増加することが示唆された。
2. 新たな産地での栽培に向けた技術の開発(R6～R10) 1) 栽培支援ツールの開発	イ. ‘はるみずき’の生育モデル式の作成 ロ. 出芽期、茎立ち期、出穂期、開花期、成熟期 ハ. 10月下旬～1月上旬の期間中、2週間毎に‘はるみずき’を播種する。 ニ. 中山間地の生育・気象データを加えることで、茎立ち期の予測式の誤差を大きく改善できた
2) 中山間地域における栽培適性の解明	イ. 中山間地域における‘はるみずき’の栽培適性の確認 ロ. 成熟期、稈長、穂長、有効穂数、遅れ穂数、一穂粒数、収量、千粒重、容積重、子実タンパク質含有率 ハ. 大和野菜研究センターほ場における栽培試験 ニ. ‘はるみずき’は標高400mが実用上の栽培限界と推察された。

3) 試験課題：ヤマトトウキにおける抽苔抑制技術の開発

目 的：ヤマトトウキの抽苔率低下につながる技術を開発し、生産振興を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 抽苔しにくい系統の選抜(R6～R10)	イ. 抽苔しにくく生育の良い優良系統の育成 ロ. 抽苔率、株幅、採種量、発芽率 ハ. H27系統S3を本播定植、抽苔株の計数および除去、生育調査 H30系統S2(前年定植、選抜済)からの採種 ニ. 本年定植のH27系統の抽苔株は発生しなかった。本年採種したH30系統の種子は、高い発芽率を示した。
2. 抽苔しにくい系統の現地実証(R7～R10)	イ. 抽苔しにくく生育の良い優良系統の現地実証 ロ. 抽苔率、株幅 ハ. H27系統S3およびH30系統S2大苗を定植 ニ. 選抜した2系統の抽苔率が低いことを現地でも確認した。一方、生根重等の生産性については、栽培する場所等の条件による影響が大きいことが推察された。
3. 抽苔しにくい系統の交雑(R7～R10)	イ. 抽苔しにくい系統の交雑による生育回復 ロ. 採種量、発芽率 ハ. H30系統S2と宇陀系統を交雑して採種 ニ. H30系統と宇陀系統の交配および採種を完了し、冬期保温育苗により来年度の栽培試験用の苗を育苗中である。
4. 摘花による種子充実化の検討(R7～R10)	イ. 種子充実化による生育回復の検討 ロ. 種子重、発芽率、初期成育量 ハ. 採種株あたり二番花を5花程度残して他を摘除 ニ. 摘花により種子の大型化は確認できたが、摘花作業の負担は非常に大きかった。

4) 試験課題：ヨモギ栽培技術の開発

目的：大和高原地域で栽培が始まっているヨモギは、茎葉が茶や入浴剤の原材料として利用されており、効率的な茎葉生産技術を開発する。種子は、法面吹付用資材としての需要が高まっており、効率的な種子生産技術を開発する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 茎葉生産技術の開発 (R6～R10) 1) 定植後年数ごとの茎葉収量性	イ. 株年生が茎葉収量に及ぼす影響を検討する。 ロ. 茎葉重量 ハ. 試験区：1年生区、2年生区、3年生区、4年生区、5年生区 ニ. 10aあたりの収量は、1年生株で1.3t、2年生株で2.2t、3年生株で2.2t、4年生株で2.3tおよび5年生株で2.8tであった。
2) 雑草防除技術の検討 (R6～R8)	イ. 茎葉栽培における雑草防除方法を検討する。 ロ. 除草時間、雑草の新鮮重、雑草種、茎葉収量 ハ. 供試株：4年生株 試験区：孔径8cmの開孔率15%マルチ区(孔径8cm、孔間隔15cm、4条植え)、 孔径8cmの開孔率23%マルチ区(孔径8cm、孔間隔12cm、5条植え)、 孔径6cmの開孔率15%マルチ区(孔径6cm、孔間隔12cm、6条植え)、 無処理区 ニ. 穴あきマルチの使用により高い除草効果が認められた。無処理区と比較すると茎葉収量は約1割減少したが、孔径8cm・4条の穴あきマルチであれば市販で容易に入手可能であり、作業性にも優れることから、実用的な雑草防除資材であると考えられた。
3) [新] 茎葉生産における追肥量の検討 (R7～R9)	イ. 追肥量の違いが茎葉収量に及ぼす影響を検討するとともに茎葉収穫前後の土壌状態を確認する。 ロ. 茎葉重量、土壌のpH、EC、硝酸態窒素 ハ. 供試株：2年生株 試験区：窒素5kg/10a施肥区、2.5kg/10a施肥区、0kg/10a施肥区 ニ. 茎葉重量は窒素5kg/10a施肥区が最も多かったが、2.5kg/10a施肥区と有意差はなかった。EC、硝酸態窒素については、すべての試験区で低い値であり、ほとんどの肥料成分が吸収されたと考えられた。
2. 種子生産技術の開発 (R6～R10) 1) 定植後年数ごとの種子収量性	イ. 株年数が種子収量に及ぼす影響を調査する。 ロ. 採種量、草丈、茎数、茎径 ハ. 試験区：1年生区、2年生区、3年生区、4年生区、5年生区 ニ. 1年生から4年生までの種子収量性を調査した。10a当たりの採種量は1年生株で108.9kg、2年生株で73.0kg、3年生株で50.1kg、4年生株で58.9kgおよび5年生株で81.7kgであった。
2) 省力的な収穫方法の検討 (R6～R7)	イ. 省力的な収穫方法を検討する。 ロ. 作業時間、種子収量 ハ. 供試株：1年生株 試験区：バインダー区、手刈り区 ニ. 作業時間はバインダー収穫区で8.3h/10a、手刈り区で27h/10aとなり、汎用機具であるバインダーの利用による大幅な省力化が確認された。
3) [新] 種子生産における追肥量の検討 (R7～R9)	イ. 採種株における追肥回数を検討する。 ロ. 採種量、草丈、茎数、茎径 ハ. 試験区：追肥2回区(5月、9月)、追肥1回区(5月)、 追肥1回区(9月)、追肥0回区 ニ. 追肥時期および追肥量の違いによる生育量や採種量についてはいずれの試験区間にも有意差は認められなかった。

5) 試験課題：吉野葛の科学的評価と栽培技術の確立

目的：奈良県の特産品「吉野葛」葛粉の原料となるクズ根の栽培技術の確立を目指すとともに、その科学的評価を行う。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 育苗方法の違いが根の生育および肥大化に及ぼす影響の検討 (R6～R9)	イ. 異なる方法で育苗した苗をほ場に定植した場合の根の肥大化について検討する。 ロ. 地下部新鮮重、根径、根数、でん粉含量、 ハ. 掘り上げ時期(1年、2年)、挿し木苗、取り木苗 ニ. 栽培1年目の影響について、地上部新鮮重、最大根茎、でん粉含量が取り木区で有意に大きくなった。また、地下部新鮮重、塊根数、歩留まりについては、処理間で有意な差は見られなかった。初期根量の違いにより、取り木区で塊根肥大が早くなる可能性があり、太い根の収穫を目的においても取り木区が有望である可能性が示唆された。
2. 根部肥大方法の検討 (R6～R10)	イ. 定植2年目株から伸長した当年枝の節を発根させ、その発根した根の肥大化について検討する。 ロ. 地下部新鮮重、根径、根数、根長 ハ. 環状剥皮処理の有無 ニ. 環状剥皮の影響について、9月16日に環状剥皮処理を実施し、12月2日に地下部をサンプリングした。地下部新鮮重、塊根数、最長根長は環状剥皮無し区で大きくなる傾向が見られ、最大根径については、環状剥皮有り区で大きくなった。環状剥皮処理による当年枝から発根させた根の肥大効果については、判然としない結果となった。
3. 成分特性調査 (R6～R10)	イ. クズ根の成分特性を明らかにする。 ロ. でん粉含量、でん粉粒度分布 ハ. 自生クズ根、1年生クズ根、吉野本葛(製品) ニ. 栽培したクズ根を精製し、でん粉の歩留まりを測定した結果、10%程度となった。また、でん粉粒度分布測定について、栽培クズ(1年生～3年生)では、自生クズや吉野本葛(製品)より小さくなった。

2. 新技術に取り組む特定農業振興ゾーンを支援する

1) 試験課題：大和高原地域の有機農業を支援するための技術開発と品目の選定

目 的：既存技術で十分に対応できていない露地栽培における害虫・雑草対策技術、施設栽培における化学農薬代替技術の開発を行う。
また、既存技術の応用で有機栽培が可能な品目を選定する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 有機農業を支援する技術の開発 (R6～R10)	イ. 最も防除効果が期待できる秋冬作型において、太陽熱土壌処理、0.6mm目合い防虫ネットおよび有機JAS適合農薬の有効性を検証する。 ロ. キスジノミハムシ被害度、収量 ハ. 品目：キャベツ、ハクサイ 処理区：フィルム二重被覆処理および有機JAS適合農薬、 フィルム一重被覆処理および有機JAS適合農薬、 有機JAS適合農薬、慣行 ニ. 全ての試験区で病害虫の被害が小さく、太陽熱土壌消毒による病害虫防除効果は判然としなかった。
2) マメ科緑肥作物の利用による化学肥料の削減	イ. 8月下旬定植のキャベツ栽培において、ヘアリーベッチ(生育期間：4月中旬から8月上旬)をR6試験と同じほ場で栽培し、減肥効果を確認する。 ロ. 土壌中の硝酸態窒素、可給態窒素(地力窒素)、栽培期間中の生育、収量 ハ. 品種：彩音 処理区：標準施肥(基肥5kg/10a)、基肥なし、 緑肥+基肥5割削減、緑肥+基肥なし ニ. ヘアリーベッチ有区と無区において、ヘアリーベッチすき込み後定植前の土壌のEC、硝酸態窒素および地力窒素は、有意差が認められなかった。ヘアリーベッチのすき込みと施肥量がキャベツ収量に及ぼす影響は認められなかった。
2. 既存技術の応用で有機栽培が可能な品目の選定 (R6～R8)	イ. 害虫被害度と収量を慣行と比較する。 ロ. 害虫被害度、収量 ハ. 品種：高原維持系統、栽培方法：パイプ栽培、 処理区：化学農薬不使用区、慣行区 ニ. 6月上旬～8月上旬にマメコガネ、8月下旬にスズメガの寄生を確認したが、その後、ほ場で見られなくなった。収穫した根茎に影響はなく、収量是有機区が855g/株、慣行区が849g/株で同等だった。
2) サトイモ	イ. 害虫被害度と収量を慣行と比較する。 ロ. 害虫被害度、収量 ハ. 品種：味間いも、処理区：化学農薬不使用区、慣行区 ニ. 茎葉のハスモンヨトウとスズメガの被害を抑えるために、有機区は6回の薬剤散布、慣行区は4回の散布を行った。収量是有機区が1518kg/株、慣行区が1565kg/株であり同等だった。
3) ゴボウ	イ. 銀色マルチを利用した有機栽培でアブラムシ飛来程度を確認する。 ロ. アブラムシ頭数、草丈、収量 ハ. 品種：てがる 処理区：銀色マルチと白マルチで、化学農薬不使用区と慣行区をそれぞれ設定する。 ニ. 正常品率が50%以下となり昨年に引き続き低かった。
4) 白ネギ	イ. 7月定植の有機栽培で害虫被害程度と収量を確認する。 ロ. チョウ目害虫とアザミウマ類被害程度、収量 ハ. 品種：ホワイスター、処理区：5月定植と7月定植で、化学農薬不使用区、慣行区をそれぞれ設定する。 ニ. 7月定植区と5月定植区を設け、害虫被害と収量を調査した結果、両区とも収穫・調製後の葉に被害は少なかったが、雑草が繁茂したため、手で除草を行った。
5) ニンジン	イ. バッタ被害度と収量を慣行と比較する。 ロ. 害虫被害度、収量 ハ. 品種：向陽二号 処理区：1mm目合い防虫ネットべたがけ区、化学農薬不使用区、慣行区 ニ. 太陽熱土壌消毒を行うことで、雑草の繁茂を抑制できた。根重は有機区で353g/株、慣行区で343g/株で同等であった。

2)試験課題：温暖化に対抗する施設野菜の生産安定

目 的：果菜類を中心に施設内環境を制御することにより各品目が抱える課題を解決する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. イチゴの収益最大化栽培技術 (R6～R10)	イ. 日中気温と日射が収量および果実品質に及ぼす影響を明らかにする。 ロ. 収量、果実品質(糖度、酸度)、ハウス内環境(温度、相対湿度、CO2濃度、日射量) ハ. 処理区3区 複合環境制御2区：改良区、従来区(YoshiMaxに準拠) 奈良方式1区 ニ. 12月～2月での改良区、従来区および奈良方式区の株あたり収量は、‘古都華’ではそれぞれ503.8g、492.5g、524.0gであり、3処理区間で有意に差は認められなかった。‘女峰’ではそれぞれ595.3g、532.0g、530.2gであり、奈良方式区および従来区と比較して、改良区で有意に多かった。ハウス内環境については調査中。
2. トマトの高位平準化栽培技術 (R6～R10)	イ. 密植養液隔離培地栽培における培地の連用について検討する(半促成作型)。 ロ. 可販果数、可販果実重量、生理障害果数 ハ. 連作培地区(2作目：攪拌(耕耘)なし)、新規培地区 ニ. 茎径、SPAD値、可販果数、可販果実重量、生理障害果数に有意な差はなかった。次作で3作目を検討する。 イ. 抑制作型の密植養液隔離培地栽培で培地冷却が生理障害果の発生に及ぼす影響について検討、実証する。 ロ. 可販果数、可販果実重量、生理障害果数 ハ. 培地冷却区(送風)、対照区 ニ. 培地への送風により、無処理培地に比べて培地温度が2.2℃低く、昇温抑制効果が確認された(2025年9月1日測定)が、生育および障害果の発生に差は無く、収穫果実重は対照区で多かった。送風による培地の乾燥に合わせた灌水方法を検討する必要がある。
3. 大和丸なすの安定生産技術 (R6～R10)	イ. 最適な遮光の開閉制御の検討 ロ. つやなし果発生率、温度、湿度、日射量 ハ. 遮光開始点2水準、無遮光 ニ. 高温高日射時のみ、弱い遮光がつやなし果に対して効果があることが分かった。

3)試験課題：イチゴを中心とした需要動向の調査と生産コスト低減の検討

目 的：イチゴを中心とした値上げの余地や生産コストの低減策を提案する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. イチゴを中心とした需要動向の調査と生産コスト低減の検討 (R6～R10)	イ. 県産イチゴの価格受容性を明らかにし、直売所出荷における商品形態の違いが経営に与える影響を試算する。 ロ. 価格受容性および属性、パック詰め時間 ハ. アンケート調査、価格感度測定分析、パック詰め調査 ニ. イチゴ‘古都華’の価格受容性調査では、商品形態によっては販売価格を上げてでも受け入れられる可能性があることや、一方で分析結果より高値で販売しているなど、適正な価格設定の判断材料となりうるデータが得られた。 イ. 生産コスト低減に繋がるデータを整理し、リースハウスの活用や自家施工が経営に与える影響を試算する。 ロ. 新規就農者へのリースハウス活用事例、自家施工の教育体制 ハ. 聞き取り調査、自家施工に係る労賃を考慮した試算 ニ. 他県ではリースハウスの活用で新規就農者の初期投資額が抑えられていることが明らかになった。これを参考にイチゴの経営試算を行うと、現状の所得率より上回った。自家施工の調査は継続して行う

4)試験課題：ナスうどんこ病に対する有効薬剤の探索と防除の省力化

目 的：効果的な防除体系を構築するために有効な薬剤を提示し、省力的な防除方法の実用性を評価する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. ナスうどんこ病に対する有効な薬剤の探索 (R6～R10)	イ. ほ場レベルでの各種薬剤の防除効果の解明 ロ. 発病率、防除価 ハ. 薬剤散布、噴霧接種 ニ. SDHI剤の通常散布による防除効果は同一系統薬剤間で差が認められ、イソフェタミドの効果が高かった。他の薬剤であるピラジフルミド、イソピラザム、ベンチピラドの防除効果は低かった。QoI剤3剤はいずれも防除効果は低く、耐性菌の発生が疑われた。
2. ナスうどんこ病に対する省力的な防除技術の開発 (R6～R10)	イ. 省力的散布法と通常の散布法との効果の比較 ロ. 発病率、防除価 ハ. 常温煙霧、燻煙剤、散布 ニ. 常温煙霧と燻煙は散布より効果がやや低い、実用性は期待できる。

5) 試験課題：野菜類のアザミウマ類に対する農薬代替技術の開発

目 的：促成イチゴや抑制キュウリ等におけるアザミウマ類に対する農薬代替技術の確立・検証を行い、生産現場への普及を目指す。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 促成イチゴにおける天敵製剤を活用したアザミウマ類防除体系の確立(R6～R10)	イ. ククメリスカブリダニの効果的な放飼回数の検討 ロ. アザミウマ類、カブリダニ類の発生量とアザミウマ類による果実被害 ハ. 慣行区、1月ベネビア区、1月ベネビア+天敵(1月以降2週間間隔放飼)区と比較 ニ. 現在試験中(1/9化学農薬、1/15～天敵放飼)
2. 抑制キュウリにおける天敵を活用したIPM体系の確立(R6～R7)	イ. 黄化えそ病に対する防除体系の確立 ロ. アザミウマ類、コナジラミ類、ホコリダニ類、キュウリ黄化えそ病の発生量と被害、スワルスキーカブリダニ、タバコカスミカメの発生量 ハ. 天敵区(幼苗期の殺虫剤散布+スワルスキーカブリダニ50,000頭/10a・2回放飼+タバコカスミカメ、ゴマ200本/10a移設)と慣行区(幼苗期+生育期殺虫剤散布)の比較 ニ. 天敵区は慣行区よりもミナミキイロアザミウマの密度抑制効果が高かった。
3. [新]露地ネギにおける物理的防除資材の簡易な設置方法の検討と防除効果の確認(R7～R10)	イ. 露地ネギにおける赤色ネットの簡易な設置方法の検討 ロ. 資材コストと設置にかかる作業時間等、アザミウマ類の被害 ハ. 赤色ネット簡易設置区と赤色ネットトンネル区と無処理区との比較 ニ. 設置時間は簡易設置区とトンネル区で同等、農薬散布時間は簡易設置区と無処理区で同等、トンネル区は他区より長かった。防除効果はアザミウマ少発生のため判定困難であった。

3. 大規模産地の継続的な発展を支える

1) 試験課題：新たなカキ品種の育成

目 的：リーディング品目であるカキについて、外観や食味が良好で栽培が容易な品種を新たに育成し、ブランド強化を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 二次選抜系統の特性調査(R6～R10) 1) 品種登録出願データの収集	イ. 品種登録出願に必要な特性データの収集 ロ. 「かきのき属審査基準」に定められている項目(51項目) ハ. ‘12AhFg7’および対照品種(‘平核無’等4品種) ニ. 品種登録出願に必要なデータ等を収集した。
2) 現地における生育および果実品質調査	イ. ‘12AhFg7’の生育および果実品質調査 ロ. 生理落果程度、収穫期、収量、果実品質、生理障害果率 ハ. ‘12AhFg7’および対照品種(‘平核無’) ニ. 現地およびセンター内で生育や収量、果実品質調査を実施した。果実重は‘平核無’と同等もしくは大きく、糖度は高かった。一方、灰色かび病の発生が散見されたほか、条紋や汚損果の発生が目立った。
2. 有望系統の育成と一次選抜(R6～R10) 1) 有望系統の育成および選抜	イ. 有望系統の育成と選抜 ロ. (高接ぎ)活着系統数(果実調査)着果数、収穫期、果実品質、生理障害果率 ハ. 所内の成木への高接ぎ ニ. H28～R3の交配で得られた高接ぎ済み系統のうち、103系統の果実を収穫し、うち3果以上の果実が得られたものは51系統であった。R6までに有望視した系統のうち、本年度の結果を考慮して、6系統が一次選抜候補になると考えられた。
2) 新たな育種技術の利用検討	イ. 農研機構の開発した新たなDNAマーカーを用いて甘柿の早期選抜を行う。 ロ. 甘渋性 ハ. DNA抽出およびフラグメント解析 ニ. ‘12AhFg7’の後代28系統について解析を行い、2系統を完全甘柿と判定した。

2) 試験課題：キク白さび病の感染環を断ち切る技術体系の確立

目 的：キク白さび病について、産地全体の清浄化を目的とし、高温処理、UV-B照射および抵抗性系統の育成を組み合わせた感染環を断ち切る 技術体系の確立を目指す。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 採穂時および定植前の高温処理技術の確立 (R6～R10)	イ. 温湯処理に関する品種間差の調査、加温処理の実用的な処理方法の検討 ロ. シュート長、障害程度、発根率、切り花品質、採穂数、温湿度 ハ. 5～9月咲き：温湯処理（49℃1分）と無処理の比較、10品種 11～12月咲き：加温装置の試作 ニ. 5月咲きの‘うずしお’や7月咲きの‘秀ちはや’など供試した全ての品種で、温湯処理による生育への影響は見られなかった。また、断熱材や温床マット等を用い加温装置を試作し、概ね40℃、90%を維持できることを確認した。水稻用の発芽機も利用可能であることを確認した。
2. UV-Bランプを用いたキク白さび病防除技術の開発 (R6～R10)	イ. UV-Bを照射する時間の検討 ロ. 発病指数、傷害程度 ハ. 放射照度(6.9 μ W/cm ²)、照射時間(1、3、6時間) ニ. 6時間処理は1、3時間処理と比較して効果が高かった。
3. 抵抗性系統の育成 (R6～R10)	イ. キク白さび病抵抗性系統の育成 ロ. キク白さび病抵抗性、開花特性(開花時期、花色、草姿) ハ. セル苗での抵抗性選抜、場内での特性調査 ニ. 抵抗性品種‘8Y3’後代900実生から、花型等により110系統を一次選抜し、抵抗性と開花特性により9系統を二次選抜した。また、これらとは別に、抵抗性品種の後代実生に対し、セル苗での抵抗性検定を行い、抵抗性を示した約500系統から54系統を一次選抜した。

4. 将来の環境変化に対応する

1) 試験課題：温暖化に適応した果樹新規品目の栽培適性調査

目 的：熱帯果樹や中晩柑類を候補として栽培適性や収益性を調査し、気候温暖化に適応した新規果樹品目を産地に提案する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 新規果樹作目候補の栽培適性調査 (R6～R8)	イ. 熱帯果樹のカキ加温ハウスや無加温ハウスにおける栽培適性を調査する。 ロ. 生育量(樹高、幹径など)、病虫害発生状況、低温障害の有無 ハ. 既存カキ加温ハウスおよび無加温ハウスにおけるポット試験栽培 ニ. 昨年に引き続き、アボカドとライチは低温耐性に優れ、いずれの施設でも越冬可能であった。
1) 熱帯果樹の栽培特性調査	
2) 中晩柑類の栽培特性調査	イ. 本県における中晩柑類の栽培適性を調査する。 ロ. 生育量(樹高、幹径等)、病虫害発生状況、低温障害の有無、開花期、着果数、果実品質 ハ. 品種6(西南のひかり、不知火、みはや、津之望等) ニ. 供試した6品種のうち、‘リスボン’を除く5品種については軽度の葉の変色等がみられた程度であり、露地条件でも越冬が可能であった。また収量は、無加温ハウスで越冬させた‘不知火’が最も多かった。
2. 新規果樹作目候補における最適な栽培方法の開発 (R6～R8)	イ. アボカドのポット栽培における最適な施肥量を明らかにする。 ロ. 生育量(葉数および幹径) ハ. 施肥量4区(ポットあたり窒素成分45g、30g、22.5gおよび15g、4カ月ごと2回、それぞれの組合せにおいて3反復(計12区)) ニ. 年間施肥量は窒素成分22.5g/ポットが適すると考えられた。

2) 試験課題：食品残渣等の未利用資源の特性把握

目 的：みどりの食料システム戦略において、持続可能な農業の実現、環境負荷低減技術の開発が求められている。

近年、農業資材の価格が高騰し、現在使用している資材の代替品の検討が必要であり、県内未利用資源の活用を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 未利用資源の成分分析 (R6～R10)	イ. 県内の食品残渣等の未利用資源の成分分析 ロ. 未利用資源の化学的特性 (含水率、C/N比、全窒素、全炭素、全リン、交換性塩基など) ハ. 成分分析 ニ. 食品製造業由来の汚泥はC/N比が低く、窒素飢餓のリスクが少ないため肥料原料として有望だが、含水率が88%と高い。乾燥おからは含水率6.3%で扱いやすく、窒素・カリが豊富。米ぬかは全窒素が2.5%、カリウム1.87%、リン酸4.08%と多い。籾殻はC/N比が73.2と高く、窒素源との併用や堆肥化が必要。葛紋り滓はC/N比が33.8で肥料成分は少ないが、繊維質で土壌改良材や堆肥副資材として利用可能。
2. [新]未利用資源の活用方法の検討 (R7～R10)	イ. 果樹剪定枝の活用方法の検討 ロ. バイオ炭試作と植物の生育調査 ハ. バイオ炭試作、生育調査(無処理区、施用処理区2) ニ. 十分に乾燥させたカキの剪定枝を無煙炭化器で燃焼させるとバイオ炭の製造に必要な350℃以上に燃焼しバイオ炭が得られ、収率は20%程度であった。‘刀根早生’の幼苗をバイオ炭を山土に混和させた2培地区(山土：バイオ炭＝1：1、5：1)で生育させると山土のみに比べ新梢数が少なかった。

シーズ創出型研究開発事業（現場対応型研究開発事業）

1. 野菜

- 1) 試験課題：‘奈乃華’の安定生産技術の開発
目 的：‘奈乃華’の安定生産技術を開発する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. ‘奈乃華’の単収向上対策 (R5～R7)	イ. ‘奈乃華’の2芽管理により厳冬期の収量低下が緩和される要因の検討 ロ. 収量、開花日、着果数 ハ. 1芽区、2芽区 ニ. 花房ごとの開花日、収量、果数のデータを取得中。
2. ‘奈乃華’の心止まり対策 (R5～R7)	イ. 頂花房分化期の高温中断が‘奈乃華’の心止まり発生に与える影響を検討する。 ロ. 心止まり株数 ハ. 3日冷蔵×3日自然環境下×3日冷蔵処理 ニ. 頂花房分化初期から処理を開始することにより、心止まりの発生は見られなかった。なお、無処理区の心止まり発生株率は約30%。

- 2) 試験課題：[新]トマト‘麗夏’の夏秋栽培における頂裂型乱形果の発生要因の解明
目 的：‘麗夏’の頂裂型乱形果発生要因を解明する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. トマト‘麗夏’の夏秋栽培における頂裂型乱形果の発生要因の解明 (R7)	イ. 頂裂型乱形果の発生要因について解明 ロ. 頂裂型乱形果発生率、莖径、収量、心室数 ハ. 育苗時：低温処理(10℃)、低温処理無(20℃) 定植時：第一花房開花前定植、第一花房開花時定植、第一花房着果後定植 ニ. 第一花房開花前定植を行った草勢が強い処理区で頂裂型乱形果発生率が高かった。育苗時の低温有無は頂裂型乱形果発生率に影響がなく、同程度であった

2. 花き

- 1) 試験課題：[新]資材費高騰や異常気象に対応した低コスト花き生産技術の開発
目 的：本県の花壇苗は、生産量で全国第5位の主要品目であるが、資材費が高騰し、経営を圧迫している。
そこで、国内で入手できる安価な資材の利用により、培養土資材の低コスト化と生産の安定を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 花壇苗生産における低コスト培養土の開発 (R7～R9)	イ. もみ殻添加による生育抑制の原因解明とイネの発芽対策 ロ. (生育抑制)水分含量、生育、乾燥重、(イネ)発芽率 ハ. (生育抑制)もみ殻添加量3水準、2品目、(イネ)県内で収集した3サンプル、調査時期3 ニ. 培養土のもみ殻混用割合の増加に伴い、土壌体積含水率は低下し、25%混用では0%混用の8割程度となった。マリーゴールドでは、毎日液肥を施用しても、混用割合の多い区で株は小さく、水ストレスの影響が示唆された。一方、秋作のパンジーでは、灌水頻度の増加に伴い、開花は遅延し、生育が劣った、以上から、過乾燥への対応は必要であるが、過湿や肥料の流亡に留意する必要があることが明らかになった。また、もみ殻の発芽対策として雨ざらしの場合は1年以上、乾燥状態の場合は2年以上の保管が有効であることを明らかにした。

- 2) 試験課題：需要期に安定して開花する小ギクの新品種育成
目 的：本県のカンパネは、生産量で全国第6位(小ギク第2位)のリーディング品目である。
しかし、小ギクでは高需要期の8月盆の出荷時期が不安定なことや端境期のシェアが低下傾向にあることが問題となっており産地や市場からはその対策が求められている。
そこで、高需要期の安定出荷や端境期のシェア拡大、省力低コスト化が可能なオリジナル品種を育成し、農業者の経営改善と産地の競争力強化を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 気象変動に左右されない安定した開花特性を持つ8月咲き小ギク品種の育成 (R6～R8)	イ. 消灯後の高温の影響を受けにくい盆出荷用小ギク品種の育成 ロ. 消灯後日数、切り花品質 ハ. 5次選抜3系統、消灯後高温区および対照区 ニ. 消灯後に農P0を展開した高温区と対照区での生育を比較。高温区での遅延日数は2系統が8日、1系統が12日であり、既存の電照用品種‘秀ちはや’の11日と同等もしくは短かった。
2. 産地間競争に打ち勝つ端境期に出荷可能な5～6月咲き小ギク品種の育成 (R6～R8)	イ. 開花時期が早く、茎伸長性の優れる夏ギク品種の育成 ロ. 開花期、切り花品質 ハ. 6次選抜1系統、5次選抜1系統、4次選抜3系統 ニ. 5系統の特性調査を実施し、開花期および切り花品質について大きな問題点が見られないため次年度も継続して試験することとした。

3. 作物

1) 試験課題：[新]小麦の倒伏軽減技術の確立

目 的：県産小麦の安定生産を実現するために、小麦栽培における倒伏軽減技術の確立を目指す。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 播種量が倒伏に及ぼす影響 (R7～R9)	イ. 令和6年産の播種量が影響している可能性が考えられるため、播種量の違いが小麦に及ぼす影響について調査 ロ. 生育・収量に関する諸特性、開花期以降の稈径、地上部乾物重 ハ. 播種量4kg・8kg・12kg/10a、各処理区3反復 ニ. 播種量4kgで稈の強度が高く稈が短くなり倒伏耐性が高まった。また収量は播種量間で差が無かった。
2. 麦踏みの効果検証 (R7～R9)	イ. 倒伏軽減効果があるとされる麦踏みの効果について検証 ロ. 生育・収量に関する諸特性、開花期以降の稈径、地上部乾物重 ハ. 麦踏み区、慣行区(対照区)、各処理区3反復 ニ. 麦踏み処理は、収量性や稈の強度に対し影響が無かった。
3. エテホン処理の効果検証 (R7～R9)	イ. 倒伏軽減効果があるとされるエテホンの処理効果について検証 ロ. 生育・収量に関する諸特性、開花期以降の稈径、地上部乾物重 ハ. エテホン処理時期2水準(止葉抽出期、出穂始期)+慣行区(対照区)、各処理区3反復 ニ. エテホン処理は、収量性や稈の強度に対し影響が無かった。

4. 果樹

1) 試験課題：カキ生産で問題となる病害虫の被害軽減技術の開発

目 的：カキ生産で問題となる炭そ病と果樹カメムシ類について、被害軽減技術を開発する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. カキ炭そ病防除技術の開発 (R5～R7) 1) 多発生要因の調査	イ. 休眠期防除薬剤の検索 ロ. 越冬枝病斑を伝った雨水中の分生孢子量、分生孢子堆発生時期 ハ. 薬剤処理区、無処理区 ニ. 雨水を濃縮する工程を試行したが分生孢子を検出することができず、休眠期防除薬剤の検索はできなかった。
2) 薬剤耐性の調査	イ. 実用的薬剤効果の把握 ロ. 接種果実病斑面積、発病果率 ハ. 果実接種試験(6薬剤、対照)(14菌株) ニ. QoI剤クレソキシムメチルでは薬剤の予防効果が低い菌株が多く確認された一方で、他のQoI剤2種と予防剤の有機銅では比較的高い予防効果がみられた。DMI剤2種については果実の熟度が進むと薬剤の効果が低下する傾向にあった。
2. 果樹カメムシ類新規予察技術の開発 (R5～R7)	イ. ツヤアオカメムシを誘引する補助光源の検討 ロ. 果樹カメムシ類誘殺個体数 ハ. LED光源(白・UV)+補助光源(調光LED)、慣行光源(水銀灯) ニ. 調色LEDで黄緑色光を補光したところ、ツヤアオカメムシについても水銀灯と近い誘殺数となったため、補光の効果があることが示唆された。

2) 試験課題：蠕動運動ポンプの農産加工利活用に関する研究

目 的：中央大学が開発した蠕動運動ポンプについて、カキの加工への活用を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 蠕動運動ポンプ処理がカキ果実ペーストの物性に及ぼす影響の調査 (R6～R8)	イ. 処理袋内に硬質の磨砕補助具を設置した場合の磨砕程度の把握 ロ. クリープメーターによるテクスチャー、官能評価(なめらかさ等) ハ. ポンプ処理時間5段階(0, 3, 15, 24, 48h)および磨砕補助具の有無、対照(ホモジナイザー破碎) ニ. 内袋にカキ果実、外袋にビー玉およびBB弾を入れて最大24時間処理したがほとんど磨砕されなかった。

3) 試験課題：[新]カキおよびウメの生産安定化技術の検討

目 的：気候変動に対応したカキおよびウメの生産安定化技術を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. カキ果実の成熟指標の把握 (R7～R9)	イ. カキ果実の成熟指標の把握に向けた生育データの蓄積 ロ. 開花期、果実肥大・着色の推移、糖度、果肉硬度 ハ. 品種2(‘刀根早生’、‘富有’) ニ. カキ‘刀根早生’の成熟について、着色の進展と果肉硬度の低下は同調して起きていたが、着色の進展と糖度の上昇については露地とハウスとで異なる様相を示す可能性が示唆された。
2. ウメ‘白加賀’の受粉用品種の特性調査 (R7～R9)	イ. ウメ‘白加賀’の受粉用品種の特性を明らかにする。 ロ. 開花期、果実品質(果実重等)、収量 ハ. 品種4(‘和郷’、‘南高’、‘鶯宿’および‘白加賀’)、場所3(所内露地、所内雨よけハウス、現地1カ所) ニ. ウメ‘和郷’について、露地の4年生樹の収量は、同程度の樹齢の‘南高’や‘鶯宿’に比べて多かった。果実の大きさは‘白加賀’や‘南高’に比べてやや小さかったが、病害や障害果の発生はみられなかった。

5. 環境

1) 試験課題：有害物質吸収抑制等による安全・安心農産物生産技術開発

目 的：本県産農産物の安全安心を確保するため、県内の土壌の有害物質の把握、輸出先の検疫に対応した農薬の検討および堆肥中の有害物質の簡易検定方法の実証を行う。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 土壌モニタリング調査 (S54～)	イ. 県内農地の土壌変化の把握と農作物の安全性の確認 調査結果については、「農用地の土壌の汚染防止等に関する法律」第十二条の規定により奈良県公報に掲載 ロ. 土壌、玄米中の有害金属含有量(ヒ素、カドミウム、銅) ハ. 現地サンプリング調査、化学性分析 ニ. 県内の田で5地点、畑で3地点調査し、カドミウム・銅については分析済みで基準を超える地点はなかった。土壌中のヒ素および田の米中のカドミウムについては分析中。
2. [新]台湾輸出向けイチゴの農薬使用時期の検討 (R7～R9)	イ. 台湾輸出向けイチゴの防除暦の作成 ロ. イチゴ防除暦で使用する農薬成分の残留濃度の推移 ハ. 施設イチゴへの農薬散布とその残留濃度分析(ヘタ付き)、農薬5成分 ニ. シアントラニブ・ロール、メチフェナシド、ピラジフルミドを12月に3回散布し12～2月にサンプリングした。分析の結果、シアントラニブ・ロールとピラジフルミドは1, 7, 14日後で、メチフェナシドは1, 7日後で台湾の残留基準値を超過した。スルホニル尿素とピラジフルミドは、農薬散布およびサンプリングを行った。農薬分析は実施中。
3. [新]クロピラリドを含む堆肥の簡易検定法の実証 (R7) 【共同機関：農研機構】	イ. 豆苗を使ったクロピラリドの簡易検定法の実証 ロ. 生育 ハ. 無処理区、処理区(5濃度) ニ. 堆肥中のクロピラリドの濃度の違いに応じて豆苗の障害程度が段階的に変化した。

6. 大和茶

1) 試験課題：[新]チャ根域制限密閉挿し短期育苗方法の確立

目 的：チャの農閑期にあたる8月中旬以降における効率的な挿し木技術を確立し、県産茶のブランド強化を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 品種の検討 (R7～R8)	イ. チャ根域制限密閉挿しの品種による生育の違いの検討 ロ. 発根率および発根状況、生存率、新梢発生の有無 ハ. 供試品種計5、各区12本×3反復 ニ. 8月下旬～9月上旬の根域制限密閉挿し苗について、供試した5品種全てで定植可能な苗を得られた
2. 挿し木密度の違いが苗生産に与える影響 (R7～R8)	イ. 挿し穂の形状を変えたより高密度な挿し木技術の検討 ロ. 発根率および発根状況、生存率、新梢発生の有無 ハ. さえあかり、2種(密植区、対照区)、各区12本×3 ニ. 対照に比べ、地上部の新梢数、地下部の根数および根長でやや劣る傾向は見られたが、新梢長や苗径などには差がない傾向が見られた。
3. 品種別定植実証 (R7～R8)	イ. 品種・挿し木時期の違いが定植後の生育に与える影響を調査 ロ. 定植後の生存率、生育状況(樹高、苗径、根長(掘上げ後)) ハ. 供試品種計5×3区(挿し木時期3、各区10本)×3反復 ニ. 8月下旬～9月上旬の根域制限密閉挿し苗を定植すると、新梢伸長が停止した12月まで供試した全ての品種で対照同様生育した。

2) 試験課題：チャ作況状況調査

目 的：本県の気象と茶主要品種の生育、収量との関係を調査し、試験研究における基礎資料とする。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 作況調査 (S38～)	イ. 本県主要品種の気象と生育・収量等との関係調査 ロ. 気象、生育、収量、収量構成、品質、病虫害等の発生 ハ. 供試品種(やぶきた) ニ. R7年度の一番茶萌芽日は、前5カ年平均よりも2日遅かった。摘採日は、前5カ年平均よりも2日遅かった。生葉収量については、前5カ年平均対比で97.4%であった。

7. 大和野菜

- 1) 試験課題：[新]中山間地域の塩類集積施設で栽培可能な品目の検索
 目的：中山間地域の塩類集積施設に適応した品目を提案する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 中山間地域の塩類集積施設に適応した品目の提案 (R7)	イ. 塩類集積土壌での収量性と除塩効果をほ場で確認する。 ロ. 生育の様相、収量 作付け前後の土壌EC、pH、硝酸態窒素、可給態リン酸、交換性カリ、交換性石灰、交換性苦土 ハ. 品目：ケール、ヨモギ、レタス 試験区：塩類集積施設と未集積施設で、無施肥区と慣行施肥区をそれぞれ設ける。 ニ. ハウス内土壌のECが0.7mS/cm程度では、ケール、レタスおよびヨモギの生育と収量に及ぼす影響は判然としなかった。栽培前後の土壌分析の結果、各品目の除塩効果は判然としなかった。

8. 経営

- 1) 試験課題：県産農産物の輸出に関する実態把握
 目的：県産農産物の輸出状況を把握し、将来的な輸出戦略を立てる際の基礎データとする。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 県産農産物の輸出に関する実態把握 (R6～R7)	イ. 県産農産物の輸出状況および他県の輸出戦略に関する情報を収集する。 ロ. 品目、出荷先、輸送ルート、出荷形態(パッケージ、荷姿)、温度管理方法等 ハ. 聞き取り調査 ニ. イチゴの輸出先進地であるフラッグシップ輸出産地のJA静岡経済連を対象に聞き取り調査を実施したところ、香港や台湾等に‘紅ほっぺ’が輸出されており、今後も他国へ販路を拡大することが明らかになった。

シーズ創出型研究開発事業(種苗育成・供給事業)

1. 穀類の奨励品種選定と種子対策事業

1) 試験課題：穀類の奨励品種選定と種子対策事業

目 的：稲・麦類・大豆の奨励品種の選定のため品種・育成系統の特性を把握する。
また、県における適応性の検討及びその奨励品種の優良種子の確保のため品種特性を維持し、原原種・原種の生産を行う。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 主要農作物種子対策事業	イ. 奨励品種決定調査等の基準品種を確保するための、原原種・原種の生産
1) 水稻原原種・原種生産(S21～)	ロ. 品種特性、種子生産量 ハ. 品種：ひとめぼれ(4系統) ニ. ‘ひとめぼれ’原原種20系統および原種41.5kgを採種した。
2) 麦類原原種・原種生産(S54～)	イ. 麦類奨励品種の県内優良種子を確保するための原原種・原種の特性維持と生産 ロ. 品種特性、種子生産量 ハ. 品種：はるみずき(12系統) ニ. ‘はるみずき’原原種を12.9kgと原種20.2kgを採種した。
3) 大豆原原種・原種生産(S54～)	イ. 大豆奨励品種の県内優良種子を確保するための原原種・原種の特性維持と生産 ロ. 品種特性、種子生産量 ハ. 品種：サチユタカA1号(8系統)、あやみどり(5系統) ニ. 夏の異常高温と乾燥、ならびに害虫の多発により著しく生育が不良となった。それらの影響で種子に褐斑が多発した。
2. 主要農作物奨励品種決定調査事業	イ. 水稻の県奨励品種を選定するため、農研機構、各県育成地より配布を受けた品種・育成系統の特性把握と県内での適応性の検討
1) 水稻奨励品種決定調査(S21～)	ロ. 生育、収量、品質 ハ. 品種・育成系統数：大和野菜研究センター予備調査7 本所予備調査19(4品種は大和野菜研セと共通)(2反復) ニ. 中山間地において、極早生の‘つきあかり’は‘あきたこまち’と収量同等で外観品質はやや良好であった。早生の‘にじのきらめき’はやや多収で外観品質は‘ひとめぼれ’と同等であった。平坦地では、早生の‘キヌヒカリ’と比べて‘にじのきらめき’は収量が30%多く、食味値は‘ヒノヒカリ’と同等であった。外観品質は‘キヌヒカリ’および‘ヒノヒカリ’と同程度であった。中生では、‘ヒノヒカリ’と比較して‘みなもさやか’は外観品質が良好で、多収、食味は良好であった。
2) 小麦奨励品種決定調査(S60～)	イ. 小麦の県奨励品種を選定するため、農研機構より配布を受けた品種・育成系統の特性把握と県内での適応性の検討 ロ. 生育、収量、品質 ハ. 品種・育成系統数：本所予備調査1系統(2反復) ニ. 農研機構配布の1系統は‘はるみずき’と比較しやや稈長が長いが稈の強度が高く倒伏しにくい可能性が示唆された。
3) 大豆奨励品種決定調査(S60～)	イ. 大豆の県奨励品種を選定するため、農研機構より配布を受けた品種・育成系統の特性把握と県内での適応性の検討 ロ. 生育、収量、品質など ハ. 品種・育成系統数：本所予備調査1系統(2反復) ニ. 夏期の高温乾燥で著しい生育不良となり、対照品種の‘サチユタカA1号’は異常な青立ちで成熟期が判然としなかった。一方農研機構配布の1系統は粒はやや小さいが正常に成熟し収量も多かった。
4) 水稻作況調査(S47～)	イ. 平坦地域の水稲作柄判定の資料を得る。 ロ. 生育(葉齢、草丈、莖数)、収量および収量構成要素、病虫害発生程度、玄米品質 ハ. 品種：ヒノヒカリ(中生)(4区) 作期：6月9日植 ニ. 6月4半旬に気温が平年より4℃以上上昇し、一時的に気温が平年並みに戻った時もあったが、概ね収穫終了まで1～2℃高いまま推移した。栽培期間である5月～10月まで降水量は極めて少なく、7～8月はほとんど降雨がなかった。草丈は平年比115%、莖数は平年比122%と旺盛な生育であった。出穂期は1日遅かった。成熟期は3日早くなった。千粒重はわずかに小さく、屑米はやや多かった。収量は平年よりかなり多かった(平年比112%)。白未熟粒が認められた。

2) 試験課題：[新] 水稻における地球温暖化対応技術の検討

目 的：水稻の高温登熟障害耐性品種の県内適性を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 水稻における地球温暖化対応技術の検討	イ. 水稻の高温登熟障害耐性品種の県内適性を検討する。 ロ. 生育、収量、品質、市場性
1) 水稻高温登熟耐性品種の現地実証 (R7～R9)	ハ. つきあかり、にじのきらめき、きぬむすめ、恋の予感 ニ. ‘あきたこまち’と比較して‘つきあかり’の収量は同等で外観品質は良好であった。‘ひとめぼれ’と比較して‘にじのきらめき’は稈長がかなり短く、収量は同等、外観品質は良好であった。‘ヒノヒカリ’と比較して‘きぬむすめ’は成熟期が早く、収量は同等、外観品質はやや良かった。‘ヒノヒカリ’と比較して‘恋の予感’がやや多収で外観品質がかなり良好であった。
2) ‘ヒノヒカリ’高温登熟障害回避技術の検討 (R7～R8)	イ. ‘ヒノヒカリ’の高温登熟障害回避技術を確立する。 ロ. 生育、収量、品質 ハ. 多肥栽培、遅植え＋後期多肥、早期中干し ニ. ‘ヒノヒカリ’の一発肥料栽培において元肥窒素量を0.3kg/a増やすと生育、収量は変わらず、外観品質が向上した。0.6kg/a増やすと稈長が伸び、穂数が増えたが収量および外観品質は変わらなかった。‘ヒノヒカリ’の遅植えにより出穂期は6日、成熟期は1日遅くなり、収量等は変わらず、外観品質は僅かに向上した。遅植えに加えて穂肥を散布すると外観品質は更に向上したが、早い穂肥は穂数が増え、小粒となった。13日間の早期中干しを実施した場合、生育、収量は変わらず、千粒重は小さく、外観品質は低下した。

2. イチゴの優良種苗供給事業

1) 試験課題：イチゴの優良種苗供給

目 的：県内イチゴの安定生産のためにイチゴの無病苗を育成・保存し、県優良親苗増殖協議会を通じて県内に 配布する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. イチゴ無病苗の保存・増殖・配布 (S50～)	イ. ウイルス病、萎黄病、炭そ病フリー苗の増殖 ロ. ウイルス、萎黄病、炭そ病の検定 ハ. 配布品種：アスカルビー、古都華、珠姫、奈乃華、ならあかり 保存品種：ウイルス検定用株 ニ. 県内に94株の無病苗を配布

3. 遺伝資源の保存と活用

1) 試験課題：奈良に歴史的ゆかりのある遺伝資源の保存と活用

目 的：遺伝資源を保存する施設(ジーンバンク)において、遺伝資源の保存と特性調査、およびその活用を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 奈良に歴史的ゆかりのある遺伝資源の保存と活用 (H28～)	イ. 品種の収集・保存と特性調査およびその活用 ロ. 収集・保存、特性調査 ハ. 発芽率調査 30種(2反復)、特性調査 5種(ダイズ他)(3反復)、種子更新(ダイズ他) 10種 ニ. 2016年にジーンバンク設立以降277種を収集・保存した。遺伝資源の発芽率についてはのべ1,615種を調査した。特性調査は258種を行った。種子の更新はのべ338種を行った。

産学官連携研究事業

1. 受託研究事業

1) 試験課題：育種素材の調査事業

目 的：国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構が育成したイチゴ、カキ、ブドウ、茶の系統の特性を育種素材として評価し、県内への普及性や品種開発の動向を早期に把握する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 果樹の新規育成系統の特性調査(H21～) 【農研機構カキ系統適応性検定試験】	イ. 国立研究機関等において育成された品種の特性および地域適応性の調査と優良系統の選定 ロ. 展葉期、開花期、収穫期、収量、果実品質等 ハ. 3系統 ニ. R5年度開始のカキ第9回系統適応性検定試験で調査対象となっている3系統について、開花期や果実品質等の特性等を調査した。
2. 果樹の新規育成系統の特性調査(H21～) 【農研機構ブドウ系統適応性検定試験】	イ. 国立研究機関等において育成された品種の特性および地域適応性の調査と優良系統の選定 ロ. 樹勢、新梢の色、葉の形等 ハ. 3系統 ニ. R7年度開始のブドウ第16回系統適応性検定試験で調査対象となっている3系統について、樹体特性等を調査した。
3. 茶樹の新規育成系統における産地適性の検討(H26～) 【農研機構茶系統適応性検定試験】	イ. 各研究機関において育成された系統の新品種候補としての判断を行うための特性および地域適応性の確認 ロ. 生育、耐寒性、耐病虫性、製茶品質 ハ. 11系統、対照 ニ. 11系統と対照品種について規定の調査を行い評価を実施した。
4. イチゴ病害抵抗性調査(R5～) 【農研機構九州沖縄農業研究センター委託事業】	イ. 萎黄病および炭そ病抵抗性を検定し、育種素材としての有用性を評価 ロ. 発病度、発病株率、枯死株率 ハ. 農研機構育成系統 標準品種：アスカウェイブ、宝交早生(萎黄病用) 宝交早生、女峰(炭そ病用) ニ. 3系統の病害抵抗性評価を行った。
5. イチゴ病害抵抗性調査(R6～) 【農研機構育成系統評価試験】	イ. 萎黄病、炭そ病およびうどんこ病抵抗性を検定し、育種素材としての有用性を評価 ロ. 発病度、発病株率、枯死株率 ハ. 農研機構育成系統 標準品種：アスカウェイブ、宝交早生(萎黄病用) 宝交早生、女峰(炭そ病用) 宝交早生、とよのか(うどんこ病用) ニ. 2系統の病害抵抗性評価を行った。

2) 試験課題：農地土壌炭素貯留等基礎調査事業

目 的：地球規模で問題となっている温室効果ガスについて農地の果たす役割を明確にすることが必要である。そこで農地からの温室効果ガスの排出・吸収量の算出に必要な農地土壌中の炭素貯留量等のデータを収集する(全国調査)。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 農地管理実態調査(H25～)	イ. 県内の農地の炭素貯留量の現状、農地管理による炭素貯留量変動および温室効果ガス発生抑制効果の評価 ロ. 土壌層位別炭素・窒素含有率、仮比重、土壌管理方法
1) 定点調査	ハ. 現地土壌サンプリング、生産者へのアンケート ニ. 県内の水田、施設ほ場等13地点において、調査を実施した。30cm深までの土壌の全炭素量は、水田土壌では最小26.8t/haで最大62.1t/ha、施設栽培土壌では最小41.8t/haで最大122.5t/haであった。
2) 基準点調査 【農林水産省(近畿農政局)委託事業】	イ. 土壌管理法の違いによる農地の炭素貯留量の変動の把握 ロ. 土壌層位別炭素・窒素含有率、仮比重 ハ. 化学肥料単用区、有機物施用区、有機物倍量施用区、有機物単用区 ニ. 収量は多い順から、有機物倍量区で819kg/10a、有機物施用区739kg/10a、化学肥料単用区490kg/10a、有機物単用区430kg/10aとなった。土壌中炭素は有機物倍量区で39.3t/ha、有機物施用区で23.9t/ha、化学肥料単用区で12.7t/ha、有機物単用区で36.3t/haとなった。

3) 試験課題：新農薬適応性試験

目 的：病害虫・雑草に対する新農薬の効果及び被害等のデータを得て、農薬登録の円滑化を図るとともに、本県での普及性を調査する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 野菜の病害虫防除および植調剤試験 (R7) 【奈良県植物防疫協会新農薬等実用化試験】	イ. 新農薬の防除効果、被害等実用性の把握 ロ. 対象病害虫に対する防除効果および対象作物に対する被害 ハ. 処理、対照、無処理区 ニ. 殺菌剤15試験(イチゴ・炭そ病、うどんこ病、萎黄病、トマト・葉かび病、キク・白さび病)、殺虫剤22試験(イチゴ・ハダニ類、アブラムシ類、ナス・ハダニ類、コナジラミ類、さやいんげん・ハダニ類、コナジラミ類、ピーマン・コナジラミ類、みずな・キスジノミハムシ、キャベツ・コナガ、ほうれんそう・シロオビノメイガ、きゅうり・ウリハムシ、はくさい・アオムシなど)、被害1試験(トマト)を実施し、5試験が実用性なし、2試験が判定不能であった以外はいずれも実用性ありの判定が得られた。
2. 果樹の病害虫防除および植調剤試験 (R7) 【奈良県植物防疫協会新農薬等実用化試験】	イ. 新農薬の防除効果、被害等実用性の把握 ロ. 対象病害虫に対する防除効果および対象作物に対する被害 ハ. 無処理区、対照薬剤区、新農薬区 殺虫剤5剤(カキ・アザミウマ類、コガネムシ類、カメムシ類等) ニ. カキの殺虫剤5件(うち1件はドローン散布)について実施したところ、薬効について4件は実用性あり、1件は実用性なしと判定された。いずれも被害は観察されなかった。
3. 茶の病害虫防除剤試験 (R7) 【奈良県植物防疫協会新農薬等実用化試験】	イ. 新農薬の防除効果、被害等実用性の把握 ロ. 対象病害虫に対する防除効果および対象作物に対する被害 ハ. 無処理区、対照薬剤区、新農薬区 殺虫剤3剤(チャノホソガ) ニ. 1剤が実用性あり、2剤が実用性なしの判定が得られた。

4) 試験課題：固化培地による育苗技術の確立

目 的：固化培地の気化熱を利用して花芽分化を促進させる。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 固化培地を用いた花芽促進効果の検討 (R6～) 【みのる産業(株)受託研究】	イ. 固化培地育苗での適切な窒素中断時期を検討する。 ロ. 葉柄窒素含量、頂花房第1花開花日、収量 ハ. 施肥中断時期3水準(①短期区、②中期区、③長期区) ニ. 8月22日までに施肥中断を行った①短期区、②中期区では③長期区に比べて頂花房の開花が早く、年内収量が多い傾向にあった。頂花房の総収量は長期区が最も多かった。

5) 試験課題：[新] ヒートポンプを利用したイチゴの生産性向上

目 的：ヒートポンプを活用し高温対策技術を確立する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. ヒートポンプ利用による1次腋花房分化遅延抑制効果の検討 (R7～R9) 【(株)イーゾ受託研究】	イ. ヒートポンプを用いた本ほの夜間冷却による「古都華」の1次腋花房遅延抑制効果を検討する。 ロ. 第1花開花日および収量(頂花房および1次腋花房) ハ. 慣行ハウス(9月11日、9月24日定植) ヒートポンプハウス(9月11日、9月24日定植) ニ. 慣行ハウス9月11日定植の頂果房第1花開花日は、慣行ハウスの9月24日定植に比べて早くなり、12月中旬までの収量も多くなった。ヒートポンプハウスの9月11日定植の頂果房第1花開花日は、慣行ハウスの9月24日定植に比べて差は見られなかったが、頂果房収量はいずれの区よりも多くなった。1次腋花房の第1花の開花は、いずれの区よりもヒートポンプハウス9月11日定植が早かった。

2. 共同研究事業

1) 試験課題：植物遺伝資源の収集・保存・提供の促進

目 的：国立研究開発法人、公設試験場、大学等有する植物遺伝資源情報を共有するネットワークの構築

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. データベースの整備と公開 (R1～R7) 【みどりの食料システム戦略実現技術開発・実証事業】 代表機関：農研機構遺伝資源センター 共同機関：弘前大学、信州大学、東京農業大学、岡山大学、愛知県等	イ. PGR-Gatewayと当県保有の遺伝資源情報の連携を維持 ロ. 連携する遺伝資源情報を県データベースから抽出 ハ. プログラミング ニ. 国立研究開発法人、公設試験場、大学等有する植物遺伝資源情報を共有するネットワークであるPGR-Gatewayに、本県保有のスイカ・メロン・トウモロコシ164点の遺伝資源情報を連携した。

2) 試験課題：農薬残留対策総合調査

目 的：農薬で使用している農薬は大部分が農地で分解されるか、一部は河川等へ流出し、環境へ何何を与えている。そこで河川中の農薬濃度を調査し、水産動植物への被害防止及び水質汚濁を軽減させるために、農薬使用基準の見直しに活用する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 農薬残留対策総合調査 (R3～R7) 1) 河川中農薬モニタリング調査 【環境省委託事業】 代表機関：(株)エスコ	イ. 県内の農地から河川へ流出する農薬量の実態を把握する。 ロ. 大和川(本流)の河川水中の農薬濃度 ハ. 分析成分：イミダクロプリド、クロチアニジン、ジノテフラン、フェノブカルブ、ブタクロール、プレチクロール 1河川(4地点)の河川水、5～11月に1～2回/週 ニ. すべての地点で、いずれの成分においても、水域基準値および水濁基準値を超えることはなかった。

3) 試験課題：茶葉における新規農薬類の残留リスク評価と合理的利用法の確立に向けた調査研究

目 的：茶で使用する農薬について中長期の残留実態調査等のデータを得て、輸出相手国の残留基準値をクリアできる利用方法を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 茶で使用する農薬の残留特性の解明 (R5～R7) 【令和6年度補正品目団体輸出強化緊急支援事業】 代表機関：農研機構 共同機関：埼玉県、京都府、奈良県、福岡県、宮崎県、鹿児島県	イ. 国内で使用頻度の高い農薬の中長期の残留特性の把握 ロ. 各茶期ごとの農薬20剤(21成分)の残留濃度 ハ. 処理区(R5年度秋番茶期散布、R6年度一番茶期散布、R6年度二番茶期散布、R6年度秋番茶期散、R7年度一番茶期散布、R7年度二番茶期散布、R7年度秋番茶期布)、無処理区、計7区、27サンプルを作成 ニ. 2024年度の分析結果では中長期(散布の次茶期以降)の検出頻度が高かった成分はイブフルフェノキン、ボスカリドであった。2025年度の27サンプルは現在分析中である。

4) 試験課題：スマート農業技術を活用したカキ栽培効率化技術の開発

目 的：遠隔操作による灌水作業の効率化や、画像判別による収穫予測技術を開発することで、産地の栽培効率化に繋げる。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 灌水が果実の収量および品質に及ぼす影響の検討 (R5～R7) 【戦略的スマート農業技術の開発・改良】 代表機関：近畿大学 共同機関：五條吉野土地改良区、(株)アズマ、(株)堀内果実園、旭ヶ丘農業生産販売協同組合	イ. 灌水がカキ果実に及ぼす影響の把握、最適化された灌水条件の把握 ロ. 果径・着色の推移、収穫期、収量、等階級、果実品質、灌水量 ハ. は場全面を遮水マルチで被覆した上で、灌水時期の異なる4種類の試験区を設定。併せてポット樹を用いて、灌水量の異なる3試験区を設定し、確認試験を実施。 ニ. 露地栽培の‘富有’では、7月～8月上旬に平年降水量相当の灌水を行うことで、果実肥大が促進される可能性が示唆された。着色に関しては試験区間で差はみられなかった。一方、ポット栽培の‘刀根早生’では、多灌水区に比べて少灌水区で果実肥大が劣るとともに、着色が早まる傾向がみられた。
2. 画像判別による着果量調査法の開発 (R5～R7)	イ. AIモデルの追加学習と撮影方法の改善による着果量推測精度の向上 ロ. 定点カメラまたはドローン空撮画像からの判別果実数と実着果数 ハ. 定点カメラとマルチスペクトルカメラ搭載ドローンにより収集された画像を用いて追加学習する。併せて、ドローンの定点旋回撮影、偏光フィルタの利用および画像演算の適用などにより、果実撮影および判別方法を改良し、着果量推測精度の向上を図る。 ニ. 定点カメラによる夜間撮影に適するように果実判別AIを再学習し、画像判別によって収穫進捗を把握できることを確認した。また、ドローンによるマルチスペクトルカメラ撮影についても同様にAIを再学習し、着色後の果実を空撮画像から判別して計数できることを確認した。

- 5)試験課題：国内生産力強化のための多収性、低窒素要求性、病害虫抵抗性野菜品種の開発
 目 的：生産性向上と持続的生産を両立させるために必要な形質を持つ革新的な品種を作出する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 周年安定供給に資する病害抵抗性イチゴ品種候補の開発(R5～R7) 【食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクト】 代表機関：農研機構 共同機関：岩手県、新潟県、埼玉県、群馬県、千葉県、愛知県、三重県、奈良県、京都府、佐賀県、カネコ種苗(株)、(株)渡辺種苗場	イ. 病害抵抗性の評価 ロ. 発病度、発病株率、枯死株率 ハ. 農研機構育成系統 標準品種：アスカウェイブ、宝交早生(萎黄病用) 宝交早生、女峰(炭そ病用) 宝交早生、とよのか(うどんこ病用) ニ. 19系統の萎黄病および炭疽病に対する抵抗性、12系統のうどんこ病に対する抵抗性を評価した。

- 6)試験課題：スマートポリネーター監視システムで活動把握！適材適所なポリネーター投入によるイチゴ高収益生産の実現
 目 的：イチゴの不受果発生を抑制し、安定的な果実生産を実現する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. ポリネーター監視システムを用いた活動評価(R5～R9) 【オープンイノベーション研究・実用化推進事業】 代表機関：徳島県 共同機関：三重県、岡山大学、近畿大学	イ. 花粉活性の品種・地域間差、ポリネーターの活動と不受果発生との関係解析 ロ. ポリネーターの活動、花粉活性、不受果率 ハ. ミツバチ：ハウス規模2水準 ヒロズキンバエ：導入量2水準 ニ. ミツバチ、ヒロズキンバエで訪花回数と不受果発生との関係を明らかにした。

- 7)試験課題：特産花きの栽培技術及び品質保持技術の開発と実証
 目 的：切り花ダリアや花壇苗、枝物といった奈良県の特産花きについて、低コスト化、計画・高品質出荷に資する技術を開発するとともに、実証により実用性を検討する。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 切り花ダリアの低コスト品質保持技術の開発と実証(R4～R7)	イ. 吸水フォームの性能評価と実送試験 ロ. 吸水量、切り花新鮮重相対値、花径相対値、萎凋程度 ハ. 2品種、吸水フォームと高吸水性ポリマーの比較、輸送後の品質調査 ニ. 吸水フォーム、ポリマー、水道水および乾式とする条件での品質比較では、水道水区に対し、ポリマー区では吸水量および花径相対値が劣ったが、吸水フォーム区では同等であった。奈良から大阪への実送試験では、市場到着時には吸水フォーム区、ポリマー区とも萎凋は見られず品質保持効果が確認できた。翌日返送された際に再度調査したところ、ポリマー区では萎凋が見られたが、吸水フォーム区では萎凋は見られなかったことから、吸水フォームは長時間輸送でも利用可能と考えられた。
2. [新]花壇苗栽培での遮光資材利用による生育改善効果の検証(R7)	イ. 遮光資材の利用による栽培環境および生育改善効果の検証 ロ. 栽培環境(気温、地温、葉温、光量)、生育(開花期、草丈、株幅) ハ. 遮光資材：シルバーネット2種、白色ネット、遮熱ネット 品目：2パンジー、ガーデンシクラメン ニ. 実測の遮光率は、シルバーネットはカタログ値と同等で、白色および遮熱ネットはカタログ値より10%程度低かった。光の波長の透過特性は資材により異なったが、地温および葉温の降温効果は光強度の影響が大きかった。シクラメンでは、実測の遮光率が40～50%程度の資材を用いることで、屋外に対して概ね70～80%程度の遮光環境となった。9月から栽培を開始したパンジー（ビオラ）では、無遮光または実測の遮光率が30%程度の資材で生育が優れ、屋外に対して50～70%の遮光環境が適すると考えられた。
3. ケイオウザクラの計画出荷技術の開発と実証(R4～R7) 【ジャパンフラワー強化プロジェクト推進】 コンソーシアム名：花き全国技術実証2025 代表機関：農研機構 参画機関数：22	イ. メッシュ農業気象データを用いた休眠打破程度の予測と冷蔵による出荷調節技術の実証 ロ. 気温、開花日数1、開花率 ハ. ほ場の標高3、冷蔵開始時期2、休眠打破方法2 ニ. 山形県産サクラを用い、低温量が500時間程度と少ない切り枝では温湯とGA処理の併用が必要である一方、低温量が十分に確保された切り枝に温湯処理を行うと開花遅延や花芽の障害が生じることを明らかにした。低温量が概ね600～800時間の切り枝では、シアナミド0.5%散布処理により温湯処理の代替が可能であった。現地試験（五條市）では、メッシュデータにより低温量を推定し、シアナミド0.5%散布処理で温湯+GA処理とほぼ同等の効果を得られることを実証した。

- 8)試験課題：気象変動に対応した耐暑性に優れたダリアの選定
 目 的：農研機構育成の良もち性品種群エターニティシリーズおよび育成系統を用い、耐暑性を評価することで、夏秋期作型における開花遅延や生育障害の解決を図る。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 耐暑性に優れたダリアの選定(R7～R9) 【政策ニーズに対応した革新的新品種開発】 代表機関：農研機構 共同機関：秋田県、山形県、長野県、高知県、宮崎県	イ. 夏秋期作型における耐暑性の評価 ロ. 到花日数、切り花品質、欠株率 ハ. 5月定植作型と6月定植作型における到花日数などの比較、6品種 ニ. 6品種を供試し、5月定植作型と6月定植作型で栽培し、開花期や切り花品質を評価した結果、‘エターニティシャイン’が耐暑性に優れていると考えられた。

みどりの食料システム基本計画推進事業

1. 環境負荷低減事業活動推進事業

- 1)試験課題：環境負荷低減事業活動の認定(みどりの認定)支援
 目 的：環境負荷低減活動型農業に取り組む農業者の育成と確保を目指す。

細目課題(試験年次)	内容(イ. 目的 ロ. 調査項目 ハ. 処理区または手法 ニ. 結果)
1. 環境負荷低減事業活動の認定支援	イ. 農林(業)振興事務所の依頼に基づき、環境負荷低減事業活動の認定申請に必要な腐植の分析の実施 ロ. 土壌中の腐植(全炭素)含量

(R5～)

ハ. 持ち込み試料の機器分析

ニ. R7年度は9件の依頼があり、56点の土壌について分析を行った。

Ⅱ 成果の公表

1. 普及に移す技術課題および普及・行政・教育の参考となる技術情報

令和7年度 第1回農業・農村の課題調整会議

令和7年9月2日（火） 農業研究開発センター 交流・サロン棟

1) 普及に移す技術課題

No.	課題名	担当
1	促成イチゴ栽培における難防除害虫防除マニュアル	環境科

2) 普及・行政・教育の参考となる技術情報

No.	課題名	担当
1	長距離輸送されるイチゴの流通実態調査	栽培・流通科
2	遮熱資材の被覆がイチゴの腋花房の開花に及ぼす影響	栽培・流通科
3	キク白さび病防除を目的とした温湯処理におけるかぎ芽の状態と生育の関係	栽培・流通科
4	イチゴうどんこ病に対するSDI剤の防除効果	環境科
5	トマト葉カビ病菌のQoI剤耐性の発生状況と同系統薬剤間における交差耐性	環境科
6	トマト葉かび病菌に対する各種薬剤の防除効果	環境科
7	ウメ品種「白加賀」と開花期の合致する品種の選定	果樹・薬草研究センター
8	培養土を用いたチャの根域制限密閉挿し方法	大和茶研究センター

2. 農業研究開発センター成果発表会

令和8年1月15日（木） 農業研究開発センター 交流・サロン棟

1) 成果の紹介（口頭発表）

発表者		課題名
栽培・流通科	神川 諭	イチゴ「奈乃華」の心止まりの要因解明と対策
果樹・薬草研究センター	米田健一	果樹カメムシ類を対象とした予察灯調査の効率化
大和野菜研究センター	厚見治之	ブロワーを使ったミニトマトの送風受粉
環境科	長山進也	奈良県内スイートコーンの早出し栽培における被覆条件と定植時期
栽培・流通科	辰巳嘉人	イチゴ輸送の現状と「傷み」の軽減に向けた試み

2) ポスター展示

1	遮熱資材の被覆がイチゴの腋花房の開花に及ぼす影響
2	イチゴうどんこ病に対する有効な薬剤の探索
3	農産物直売所におけるイチゴ「古都華」の価格感度測定分析
4	カキにおけるわい性台木の利用効果
5	AI判別によるカキ着果量調査技術の検討
6	「ヒノヒカリ」の高温登熟障害対策（第1報）
7	小麦の生育予測に向けた取り組み
8	気象データを活用したケイオウザクラの休眠打破と促成開花
9	赤色防虫ネット直掛け被覆が害虫の発生に及ぼす影響
10	「カズサキヨモギ」の茎葉栽培における雑草防除方法の検討
11	SSRマーカーを用いた地域育成醸造用ブドウの親品種の推定 （（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所）
12	大阪農産物魅力向上・価値創造事業における「大阪府産泉州きくな」（ジュンギク）の調査・研究 （（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所）
13	梅酒漬梅を用いたスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）による水稻苗の食害抑制 （奈良県立磯城野高等学校）
14	花ミョウガの無病苗への挑戦 （奈良県立磯城野高等学校）

3. 刊行物

【奈良県農業研究開発センター研究報告 第57号 2026.3】

〔原 著〕

虎太有里・印田清秀・原田優生・辻本直樹	花蕾の日成長速度モデルを用いた7～8月咲き小ギクの収穫期予測	57:1-8(2026)
北條雅也・廣岡健司	奈良県産カキの果実中タンニンおよびアスコルビン酸含量の変動要因解析	57:9-17(2026)
長山進也・高松元紀・西川学	奈良県におけるスイートコーンの早出し栽培のための被覆条件と定植時期の評価	57:18-25(2026)
山本英治・西川 学	奈良県内大和川水系における水稻用農薬の河川水中濃度	57:26-36(2026)
辻本誠幸・倉田 淳・兵頭由浩・上田直也・杉村輝彦	わい性台木の利用がカキ‘刀根早生’早生系統の生育、果実品質および作業性に及ぼす影響	57:37-48(2026)
大谷正孝・安川人央	キハダの生育に及ぼす育苗容器の影響	57:49-60(2026)

〔短 報〕

神川 諭・矢奥泰章・田中聡馬・佐野太郎	イチゴ高設ベンチを利用したイチゴ後作のスイカ栽培の検討	57:61-64(2026)
---------------------	-----------------------------	----------------

〔研究ノート〕

杉村輝彦	カキ炭疽病の発生に関するリスク要因分析	57:65-70(2026)
長城利彦	農産物直売所におけるイチゴ‘古都華’の価格感度測定分析(第2報) -奈良県橿原市を事例として-	57:71-77(2026)

【令和7年度成果情報】 12月4日ホームページ公開

課題名	担当
長距離輸送されるイチゴの流通実態調査	栽培・流通科
遮熱資材の被覆がイチゴの腋花房の開花に及ぼす影響	栽培・流通科
キク白さび病防除を目的とした温湯処理におけるかぎ芽の状態と生育の関係	栽培・流通科
トマト葉カビ病菌のQoI剤耐性の発生状況と同系統薬剤間における交差耐性	環境科
トマト葉かび病菌に対する各種薬剤の防除効果	環境科
ウメ品種「白加賀」と開花期の合致する品種の選定	果樹・薬草研究センター
培養土を用いたチャの根域制限密閉挿し方法	大和茶研究センター

【栽培マニュアル・技術資料】

資料名	ホームページ 公開年月
渋柿を原料としたカキ糖蜜漬け作成マニュアル	2025. 8
茶生産技術指針	2025. 10

【農業研究開発センターニュースvol.168 2025.6】

バンカー型製剤によるワタアブラムシの防除
遮熱資材の長期被覆によるイチゴの一次腋花房の開花遅延抑制
新病害： <i>Globisporangium irregulare</i> によるワスレナグサ根腐病
ウメ‘白加賀’の安定生産に向けた受粉用品種の検討
ヨモギ茎葉栽培における雑草防除方法
奈良県オリジナル酒米‘なら酒1504’の試験醸造

【農業研究開発センターニュースvol.169 2025.12】

気象データを活用したケイオウザクラの休眠打破と促成開花
イチゴの輸送中に生じる衝撃
農地への有機物資材連用による土壌中の炭素量および収量への影響
AI画像判別によるカキ着果状況調査法の検討
赤色防虫ネット直がけ被覆が害虫の発生に及ぼす影響
研究功労者表彰を受賞しました／イベントを開催しました

4. 知的財産権の保有状況

特許権等の名称	発明考案者	出願 年月日	登録年月日 登録番号	共同保有 機関
切り花収穫機	仲 照史 角川由加 小山裕三	H21.10.13	H26.11.7 特許第5640270号	農業・食品産業技術総合 研究機構 みのる産業(株)
燃焼排ガス中の二酸化炭素を利用した 園芸用施設への二酸化炭素供給装置	西本登志 仲 照史 廣岡健司 佐野太郎	(H23.9.13) 国内優先権 H24.9.12	H29.7.28 特許第6179915号	産業技術総合研究所 農業・食品産業技術総 合研究機構 大阪ガス(株) 日本軽金属(株)
乳酸菌及び皮膚外用剤	北條雅也 石川亜希 木村 桐 濱崎貞弘	R5.8.10	特願2023-130873号	(株) テクノープル
ポリネーターの巣門前における活動の 監視システム	佐野太郎 辰巳嘉人	R7.12.25	特願2025-281523	徳島県 三重県 (株) アイエスイー

品種名	育成者権者	登録年月日	登録番号	備考
古都華	奈良県	H23.10.5	21164号	
春日の紅	奈良県	H25.3.6	22340号	
千都の舞	奈良県	H28.3.1	24776号	
春日の鈴音	奈良県	H29.3.28	25914号	
HC3-6-10-11	奈良県	H29.4.25	25973号	やまと甘なんばん
春日W1	奈良県	H30.10.10	27042号	春日の泉
春日Y1	奈良県	H30.10.10	27043号	春日の光
春日Y2	奈良県	R2.3.9	27845号	春日の星
珠姫	奈良県	R6.11.8	30495号	
奈乃華	奈良県	R6.11.8	30498号	
春日R1	奈良県	R6.12.20	30683号	春日の姫
春日W2	奈良県	R6.12.20	30684号	春日の空
ならあかり	奈良県	R7.10.21	31333号	
なら酒1504	奈良県	出願R6.4.26	出願番号37411号	
春日W3	奈良県	出願R7.10.21	出願番号38238号	春日の心

5. 学会・研究会誌への投稿等

著者名	タイトル	種類	学会・研究会誌名	巻号：頁	発表年月
浅野峻介	First report of root rot caused by <i>Globisporangium irregulare</i> on forget-me-not (<i>Myosotis</i> sp.)	原著	Journal of General Plant Pathology	91:240-244	2025. 5. 4
浅野峻介・芳田侃大・勝真雅大	Efficacy of a <i>Beauveria bassiana</i> -based biofungicide against strawberry powdery mildew caused by <i>Podosphaera aphanis</i> under various conditions and its potential mode of action	原著	Journal of Phytopathology	173(3):e70100	2025. 6. 17
浅野峻介・芳田侃大	Cross-resistance between pyribencarb and azoxystrobin in <i>Fulvia fulva</i> causing tomato leaf mold and efficacy of fungicides with several modes of action	原著	Phytoparasitica	54(1):19	2025. 12. 26
厚見治之・浅野峻介・浅尾浩史・矢奥泰章・西本登志	ヒロズキンバエを利用するイチゴ栽培における果実と花粉媒介昆虫の細菌叢	原著	園芸学研究	25(1):57-64	2024. 1. 15

6. 学会・研究会、シンポジウム等での発表・講演

学会・研究会(口頭発表)

発表者	タイトル	学会・研究会名	掲載誌 巻号：頁	発表 年月日
米田健一・ 小島 英	カキ炭そ病における果実接種と画像 処理による薬剤効果比較方法の検討	関西病虫害研究会 第107回大 会	講演要旨集：10	2025. 6. 3
浅野峻介	サイネリアにおけるキク矮化ウィロ イド感染の国内初確認	関西病虫害研究会第107回大 会	関西病虫害研究 会第107回大会講 演要旨：1	2025. 6. 3
藤森颯太	遅効性薬剤に対応したアザミウマ類 の簡易薬剤感受性検定法の開発	関西病虫害研究会第107回大 会	関西病虫害研究 会第107回大会講 演要旨：17	2025. 6. 3
乾 未樹	奈良県におけるカキの加工および輸 出に関する取り組み	令和7年度近畿中国四国農業 試験研究推進会議果樹推進部 会果樹研究会	—	2025. 7. 16
厚見治之・浅 尾浩史・峯 圭司・森岡 正・上田悠 平・西本登志	奈良県主要イチゴ品種における花粉 稔性の品種間差と季節変動	令和7年度園芸学会 近畿支部大会	園芸学研究 第25巻 別冊1：471	2025. 8. 28
藤森颯太	施設ピーマン栽培でのクロヒョウタ ンカスミカメによるヒラズハナアザ ミウマ密度抑制効果	第34回天敵利用研究会	第34回天敵利用 研究会講演要 旨：7	2025. 8. 2
佐野太郎・神 川 諭・辰巳 嘉人・田中聡 馬	間欠冷蔵処理がイチゴ‘奈乃華’の 時期別収量に及ぼす影響	令和7年度園芸学会 近畿支部大会	園芸学研究 第25巻 別冊1：471	2025. 8. 28
田中聡馬・神 川 諭・佐野 太郎・辰巳嘉 人	遮熱資材の被覆がイチゴの腋花房の 開花に及ぼす影響	令和7年度園芸学会 近畿支部大会	園芸学研究 第25巻 別冊1：474	2025. 8. 28
浅野峻介	RNA-seqによるイチゴうどんこ病に対 するボーベリア・バシアーナ乳剤 (ボタニガードES) の作用機作の検 討	令和7年度日本植物病理学会 関西支部会	プログラム・講 演要旨予稿集：2	2025. 9. 18
佐野太郎・神 川 諭・辰巳 嘉人・田中聡 馬	ナス‘大和丸なす’のつやなし果発 生に関係する環境条件の検討	園芸学会令和7年度秋季大会	園芸学研究 第24巻 別冊2：160	2025. 9. 20

神川 諭・田中聡馬・佐野太郎・辰巳嘉人	バイオスティミュラントとしてのGABA含有乳酸菌発酵液の施用がトマト尻腐れ果の発生に及ぼす影響	園芸学会令和7年度秋季大会	園芸学研究第24巻別冊2:173	2025. 9. 20
上田悠平・峯圭司・浅尾浩史・森岡正・西本登志	奈良県東部中山間地域における'丹波黒'エダマメの播種日の検討	園芸学会令和7年度秋季大会	園芸学研究第24巻別冊2:193	2025. 9. 20
藤森颯太	露地キクにおけるクロゲハナアザミウマの各種薬剤の殺虫効果	第29回農林害虫防除研究会	第29回農林害虫防除研究会講演要旨：第2日目講演1	2025. 9. 5
梨原嵩司	有機茶園における二番茶期の赤色防虫ネット直掛け被覆が病害虫の発生に及ぼす影響	2025年度日本茶業学会研究発表会	茶業研究報告第140号(別冊):35	2025. 10. 22
虎太有里	鉢花・花壇苗生産における暑熱対策	令和7年度花き推進部会問題別研究会	令和7年度近畿中国四国農業試験研究推進会議花き推進部会問題別研究会資料:25-33	2025. 11. 6
山本英治	クズの根が肥大する圃場栽培技術の検討	近畿土壌肥料研究協議会第40回研究会	—	2025. 11. 28
厚見治之・峯圭司・浅尾浩史・上田悠平・森岡正	大和高原地域におけるサトイモ有機栽培の検討	第26回日本有機農業学会大会	第26回日本有機農業学会大会有機農業研究者会議2025資料集：57	2025. 12. 06
浅野峻介	ダリアの主要なウイルス・ウイロイドの診断・防除技術の確立（学位取得までの道のり）	第11回生態と防除研究会	講演要旨予稿集：37-38	2025. 12. 23
小島 英・米田健一	奈良県のカキにおけるドローン防除の検討	令和7年度果樹茶業研究会果樹虫害研究会	講演要旨:5	2026. 1. 27
浅野峻介	イチゴうどんこ病、炭疽病の生態に基づく防除	園芸学会令和8年度春季大会小集会	講演要旨予稿集：37-38	2026. 3. 20
神川 諭・仲照史・佐野太郎・辰巳嘉人・田中聡馬	イチゴ‘奈乃華’の心止まり抑制対策技術	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究第25巻別冊1:161	2026. 3. 21

辰巳嘉人・佐野太郎・田中聡馬・神川諭	冷蔵保存がイチゴ‘古都華’の香気成分に及ぼす影響	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究第25巻別冊1:163	2026. 3. 21
佐野太郎・神川諭・辰巳嘉人・田中聡馬	遮光が‘大和丸なす’果実の光沢に及ぼす影響	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究第25巻別冊1:148	2026. 3. 22
厚見治之・峯圭司・浅尾浩史・上田悠平・森岡正・佐野太郎	イチゴ促成栽培におけるヒロズキンバエの訪花回数と受精不良果発生の関係	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究第25巻別冊1:122	2026. 3. 22
辻本誠幸	カキにおける緑枝を用いた高接ぎ条件の検討	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究第25巻別冊1:100	2026. 3. 22
浅野峻介	奈良県でのキク白さび病に対する薬剤防除の最適化に向けて	第35回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム	講演要旨予稿集：37-38	2026. 3. 25
藤森颯太	各種薬剤のヒラズハナアザミウマに対する効果とクロヒョウタンカスミカメに対する影響	第70回日本応用動物昆虫学会大会	第70回日本応用動物昆虫学会大会：78	2026. 3. 28

学会・研究会(ポスター発表)

発表者	タイトル	学会・研究会名	掲載誌 巻号：頁	発表 年月日
辻本誠幸	カキ‘刀根早生’における気温データのみを用いた開花盛期推定法の検討	園芸学会令和7年度秋季大会	園芸学研究 第24巻 別冊2：299	2025. 9. 21
虎太有里・辻本直樹・武田偉吹	メッシュ農業気象データを利用したケイオウザクラの低温遭遇量推定と促成開花	園芸学会令和7年度秋季大会	園芸学研究 第24巻 別冊2：454	2025. 9. 21
辻本直樹・虎太有里・武田偉吹	苗の高温処理によるキク白さび病の防除効果と生育への影響	園芸学会令和7年度秋季大会	園芸学研究 第24巻 別冊2：458	2025. 9. 21
山下海斗・山本英治	クズ (Pueraria lobata Ohwi) における効率的な採苗方法の探索：越年茎を用いた挿し木法および当年茎のポット受け採苗法の検討	日本作物学会第260回講演会	日本作物学会第260回講演会要旨集p. 76	2025. 9. 22
山本英治	台湾向け輸出イチゴにおける適切な農薬使用時期の検討	第35回農薬環境動態研究会	—	2026. 1. 9
米田健一・乾未樹	定点カメラと深層学習モデルによる画像判別を利用したカキ着果状況調査方法の検討	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究 第25巻 別冊1：262	2026. 3. 22
虎太有里・辻本直樹・武田偉吹	挿し木によるスモークツリーの効率的増殖方法の検討	園芸学会令和8年度春季大会	園芸学研究 第25巻 別冊：P172	2026. 3. 22

7. 著書・雑誌・新聞・資料等への掲載、イベント展示、報道発表、テレビ・ラジオ報道

(著書・雑誌)

執筆者名	タイトル	掲載誌名	発行元・出版社	巻号：頁	発表年月
米田健一	奈良県におけるカキ防除暦作成の考え方	植物防疫	(一社)日本植物防疫協会	79号(5)：288-294	2025. 5
虎太有里	夏季の局所冷却によるシクラメンの開花促進	施設と園芸	(一社)日本施設園芸協会	No. 210：50	2025. 7
浅野峻介	ワスレナグサの根腐（ねぐされ）病はどのように感染し発病するのか	iPlant	植物医科学出版会	3：7	2025. 7
井村岳男	農業害虫の発生予察調査における自動識別AIの利用	昆虫と自然	ニューサイエンス社	60(10)：112-15.	2025. 9
浅野峻介	<i>Fuligo gyrosa</i> によるキク変形菌病の初報告およびイチゴで確認された変形菌	植物防疫	(一社)日本植物防疫協会	79号(10)：16-19	2025. 10
浅野峻介	イチゴうどんこ病に対する有効な薬剤の探索	施設と園芸	(一社)日本施設園芸協会	No. 211：71	2025. 10
井村岳男	昆虫病原性糸状菌ボーベリア・バシアーナ製剤によるナスとインゲンの病害虫の同時防除	農業および園芸	(株)養賢堂	100(11)：971-977.	2025. 11
倉田 淳	奈良県におけるカキ病害の最近の発生動向と防除対策	果実日本	日本園芸農業協同組合連合会	81(1)：20-23	2026. 1
梨原嵩司	二番茶不摘採有機栽培茶園における剪枝後の吸汁性害虫の発消長について	茶やまと	奈良県茶生産青年協議会	第75号：25-27	2026. 2
虎太有里	気象データを用いた露地小ギクの収穫期予測技術	農業技術大系花卉編	(一社)農山漁村文化協会	追録第28号	2026. 3
辻本直樹	高吸水性ポリマーによる輸送中の品質保持	日本ダリア会会報	日本ダリア会	第22号	2026. 3

(イベント展示)

担当	タイトル・テーマ・見出しなど	イベント名	発表年月日
果樹・薬草研究センター	果樹・薬草関係成果の紹介（パネル展示）	柿博物館スペシャルデー	2025.10.26 11.7
農業研究開発センター	センターの概要紹介、イチゴの交配・土壌分析・ヨモギの生産の研究紹介・体験	農業研究開発センター公開デー	2025.11.8
農業研究開発センター	県育成品種の紹介、研究成果の事業化、新たな共同研究シーズの発見	アグリビジネス創出フェア2025	2025.11.26-28
農業研究開発センター	研究成果の発表（ポスター展示）	農業研究開発センター成果発表会	2026.1.15

(報道発表)

担当	タイトル	発表年月日
研究企画推進課	センターニュースvol.168を発行しました	2025.7.15
研究企画推進課	農業研究開発センター公開デー開催！	2025.10.1
研究企画推進課	農業研究開発センター成果発表会を開催します！	2025.12.1
研究企画推進課	センターニュースvol.169を発行しました	2026.1.30

(新聞)

担当者	タイトル・テーマ・見出しなど	提供先メディア	掲載日
藤森颯太	春夏野菜主要病害虫防除のポイント 虫害	全国農業新聞 第3370号	2025.4.4
藤森颯太	秋冬野菜主要病害虫防除のポイント 虫害	全国農業新聞 第3387号	2025.8.8

(奈良新聞「農を楽しむ」)

担当者	タイトル	所属	掲載日
長城利彦	水稻の代かき同時直播	研究企画推進課	2025.5.11
濱崎貞弘	コムギのデンブンの話	栽培・流通科	2025.6.8
厚見治之	ジネンジョの植え付け	大和野菜研究センター	2025.7.13
竹中 勲	クリの害虫とその天敵	環境科	2025.8.10
佐野太郎	地域に根ざすナス品種	栽培・流通科	2025.9.14
乾 未樹	世界の柿生産	果樹・薬草研究センター	2025.10.12
山本英治	堆肥の種類とその効果	環境科	2025.11.9
辻本直樹	想いを運ぶ花	栽培・流通科	2025.12.14
倉田 淳	果樹のカメムシ	果樹・薬草研究センター	2026.1.11
脇坂 勝	お茶の樹の増やし方	大和茶研究センター	2026.2.8
神川 諭	GABAの増やし方	栽培・流通科	2026.3.8
厚見治之	サトイモの減農薬栽培	大和野菜研究センター	2026.4.12

(テレビ・ラジオ)

発表者	番組・タイトル・テーマ・見出しなど	提供先メディア	発表年月日
東井君枝・神川 諭	「クリスマスケーキにいちご」な奈良県のおかげ	日本経済新聞	2025.12.8
神川 諭	「クリスマスケーキにいちご」な奈良県のおかげ	テレビ大阪	2025.12.8
東井君枝・神川 諭	「ならあかり」について	日本農業新聞	2026.1
神川 諭・辰巳嘉人	奈良県育成品種のイチゴについて	eo光テレビ	2026.2.19
神川 諭	奈良のブランドいちご「古都華」	毎日テレビ	2026.3.15

8. 令和7年度 奈良県農業研究開発センター研究評価委員会 評価結果

令和8年2月25日開催 農業研究開発センター交流・サロン棟

評価対象課題等について

- 1) 評価対象課題
第3期奈良県農業研究開発センター中期運営方針に基づき、令和7年度に実施した、5つの重点目標、17の研究課題を対象とする。
- 2) 評価方法
課題設定、手法の妥当性、達成状況について5段階の評価を行う。評価委員会の各委員の評点を合算の上、平均値を求める。
- 3) 評価結果の活用
農業研究開発センター所長は、評価結果を研究活動等に適切に反映させ、9未満の場合は、委員の提言に従って修正または見直しを行い、研究企画委員会へ報告する。

評価委員名簿

北口 紀子	奈良県消費生活相談員連絡会前会長
平井 久美	奈良県指導農業者会前会長
松山 芳巳	奈良県農業協同組合常務理事
森山 達哉	近畿大学農学部長
中野 泰寿	奈良県食農部長

各研究課題の評価(評価委員の平均値で記載)

重点目標	研究課題	評価区分			合計
		課題設定 平均	手法の妥当性 平均	達成状況 平均	
	評価委員の意見				
新たな奈良県農業の 取組を支える	長距離輸送性を高めるイチゴの品質保持技術の開発	5.0	3.8	4.0	12.8
	・奈良県産のイチゴを首都圏などの遠方で普及させるためには、長距離輸送時の損傷の抑制・制御は重要な課題である。今回、蛍光検出などの新たな損傷評価法の開発に成功しており、また振動器などの導入によって定量的な評価が可能となった点は大いに評価できる。今後は、包装資材や包装方法の改善などの検討が必要であると考えられる。クッションゲルなどの適用も可能かもしれない。また、損傷に対する意見や受容性などもおさえておく必要があると考えられる。系統の育種に関しても順調に進んでいる点は評価できる。 ・「古都華」はとてもおいしく日本人だけでなく海外の人からも好まれるのは理解できる。包装容器など資材高騰の中での検討は大変なことだろうと思う。イチゴの価格が保たれるよう期待する。 ・長距離輸送における「古都華」と「奈乃華」の実験結果は納得の数値になっている。今後は「古都華」にも対応できる品質保持技術の開発を期待している。 ・イチゴ農家からの話では、資材が高いのが見合う価格を維持するために、品質向上に努めているとのこと。輸送中の取扱いが大きく影響していると心配の声が多い。				
	一番茶生産に特化した有機栽培体系の確立	4.6	4.0	3.6	12.2
	・海外における日本茶の人気が高まっている。また、海外市場、特にEC諸国からは有機栽培茶葉が求められている背景からも、本課題は重要な取り組みと言える。一番茶摘採後の最適な剪枝時期の目星がついたことは評価できる。ただし、害虫や天敵の変化は単年の評価では分からないので、数年間の継続検討が必要と考えられる。 ・日本茶が海外の人にも喜ばれていることは報道でもあたり前になっている。大和茶も多くの人に味わってもらえるよう、有機栽培の体系が確立されることを願う。 ・一番茶生産に特化した有機栽培において、翌年度以降の収量・品質に与える影響は興味深い。引き続き、研究いただきたい。 ・農家からは、粉末にする工場や関連機関が増える事が大いに望まれている。生産しても出荷できない状況もある。				
	枝物の短期育苗技術と品質保持技術の開発	5.0	3.4	3.2	11.6
	・中山間部を中心として、枝物の需要が増加しているなか、本課題は重要である。育苗法や増殖法、品質保持技術が明らかになった点は評価できる。耕作放棄地などへの栽培適性の調査なども今後必要と思われる。 ・輸出が増加している背景もあり、枝物の短期育苗技術と品質保持技術の開発は急務と思われる。 ・「高く売れる枝物」に向けて、品質保持技術の開発は重要な課題である。海外需要が旺盛な品目ごとの研究を引き続き行っていただきたい。期待している。 ・これからの苗木生産に期待している。				

重点目標	研究課題	評価区分			合計
		課題設定 平均	手法の妥当性 平均	達成状況 平均	
	評価委員の意見				
「奈良の食」の魅力を活かす	奈良県オリジナル酒米新品種の栽培技術の確立	4.4	4.0	4.0	12.4
	・品種登録や大規模現地適応性試験にまで進展したことは大いに評価できる。栽培特性の調査に関しては、複数年度のデータを期待したい。農家だけでなく、農協や醸造元、販売店、外食業などが力を合わせて普及やブランド力アップに関わっていけることを期待する。なお、食用米との価格差が維持でき、収益性が担保されることも重要であろう。また本課題は十分に目的を達成しつつあるため、終了に向けた整理も検討していただきたい。 ・「奈々露」のデビューはこれまで携わってこられた方々の努力の賜物だと思う。これからは販売店や外食業などとタイアップしてブランド力を強化して、より多くの人に知ってもらいたい。 ・「なら酒1504」の栽培技術の確立はほぼ終了に近づいている。作付定着に向けた栽培マニュアルの完成と収量増に向けた検討をお願いしたい。令和9年度以降の「水稻の高温対策技術の確立」の取組みも期待している。 ・生活においての米価が見通せると酒米・酒造りにも力が入ると思う。酒造メーカーが酒米作りをする事で農家との連携プレーに期待している。				
	県産小麦の生産量増加に向けた栽培管理技術の確立	4.2	3.8	3.6	11.6
	・県産小麦の「はるみずき」の生産量増加は、要望も多い重要な課題である。奈良県産の小麦を用いたパンの製造希望は今後も増加すると予想される。栽培管理技術として、栽培可能な標高も明らかになり、より精度の高い生育予測モデルも作成された点は評価できる。3月上旬の茎立期の追肥効果については再現性の確認が必要。栽培マニュアルの改定も終え、今後は終了に向けた整理を検討してほしい。 ・県産小麦を用いたパンの製造は、今後多くの人々が望むだろう。マニュアルが確立され生産が増えること、学校給食で子供たちが口にできることが楽しみである。 ・「県産小麦の生産量増加」は様々な問題があり、すぐには結果につながらない課題ではあるが、栽培管理技術面でのサポートを引き続きお願いしたい。栽培マニュアルの完成に向けて頑張ってください。 ・奈良でしか味わえない小麦というのが、うれしいキャッチフレーズになると良いと思う。				
	ヤマトトウキにおける抽苔抑制技術の開発	4.2	3.4	3.2	10.8
	・着実に進んでいるように思われる。抽苔しにくい系統の育種から現地試作、現地での有効性の検証へと、栽培現場での実証へとシフトしていく必要性を感じた。なお、在来系統よりも抽苔率が低いことに関して、統計的な解析が望まれる。また、地域差の課題もあると考えられる。 ・ヤマトトウキは奈良県を代表する薬用植物であり、この課題は必要なものだと考える。抽台しにくい系統の育成が確立され、最終目標に近づくことができれば良いと思う。 ・奈良県を代表する生薬であるヤマトトウキを守っていくためには、抽苔しにくい良質なヤマトトウキを収穫できる技術が必要である。成果も出てきており、引き続き頑張っていたきたい。 ・ヤマトトウキは農家的には儲けにつながりにくい。薬草としてのアピール、奈良との関わりが広く知られることを望む。				
	ヨモギ栽培技術の開発	4.4	3.6	4.0	12.0
・宇陀や東吉野などの中山間地において、ヨモギの安定栽培技術の要望は高い。これらの地域での新しい特産品として成長させるためには安定した栽培技術の確立が必須である。本研究では雑草防除の方法として穴あきマルチの効果が判明したことや、水稻用バインダーの利用による収穫時の省力化にも成功し、評価できる。今後は、これらの種々の工夫を組み合わせ、効率的で省力的な栽培技術の開発が達成され、また、ヨモギハムシの防除などの検討を進めて頂きたい。さらに、奈良県産のヨモギの品質評価や品質の良さのアピールなど、利用や加工などに向けた高付加価値化の検討も期待したい。 ・国内産のヨモギを期待する声は多いと思われる。栽培技術が開発されれば、生産農家も増えることが見込まれるので、計画どおりに遂行されることを期待する。 ・国内産のヨモギの需要が高く、まだ生産農家が少ないため収益も見込める。安定した収量と単価が課題だが、就農したいと思える作物にしていければと思う。これからの研究に期待している。 ・ヨモギの需要性と生産量の増加に期待している。					
吉野葛の科学的評価と栽培技術の確立	4.4	4.0	4.0	12.4	
・吉野葛は県内のブランド産品の一つであるので、その安定栽培化は重要な課題である。今回、デンプン含量の多い育苗方法が確立されたことは評価できる。さらに、デンプンの粒径が評価に使用できる可能性を示したことも良い結果である。糊化特性が栽培でも変化が無かったことも良かった。今後は食味や官能評価、加工特性等の検討も期待したい。 ・奈良県を代表する食材であり、ブランド品であると考え。天然の葛根は危機的状況であるため、早期の栽培技術の確立が望まれる。最終目標が達成されるよう期待している。 ・吉野葛栽培技術の中で「取り木」「立体仕立て栽培」での栽培が優位な結果になったことは興味深い。より、高品質で多収となる栽培技術を確立していただきたい。期待している。 ・本葛は個人的にも好きでよくお料理にも使うので今後の栽培に期待している。					

重点目標	研究課題	評価区分			合計
		課題設定 平均	手法の妥当性 平均	達成状況 平均	
評価委員の意見					
新技術に取り組む特定農業振興ゾーンを支援する	大和高原地域の有機農業を支援するための技術開発と品目の選定	4.8	3.8	4.0	12.6
	・大和高原地区は、無農薬栽培で有名になっているので、そのサポートと進展は重要な課題である。さまざまな工夫や技術を駆使して一定の成果は得られていると思われる。新規に有機栽培可能な露地品目についても、サトイモやジネンジョで慣行と同程度の収量が得られたことは評価できる。ダイコンは難しいようだが、今後はさらにニンジンやカボチャなど新たに選定が進むことを期待したい。 ・「有機農業」は皆が関心を持つところだと思う。技術が開発されると県内の市町村でも広めてもらえるのではないかと。今後の動向を注視したい。 ・これからの農業の核となりうる有機農業の新技術開発に大変ご尽力いただいている。地域や野菜品目などにより実証実験結果に差が出ており、短期間での成果は困難であると思うが、引き続き研究開発に期待している。 ・高齢化が進んでいる農業界だが儲かる有機栽培につながることに期待している。				
	温暖化に対抗する施設野菜の生産安定	4.4	4.2	3.8	12.4
	・温暖化や大雨など、極端な気候変動に対応する施設野菜の生産方法の確立は重要事項であるが、他府県でも汎用的に検討されている事項と、奈良県独自の課題や適正化などをうまくミックスさせて研究を進める必要がある。大和丸なすに関しては、科学的視点での検討も行って、強光時に弱遮光することで光沢の改善が得られたことは評価できる。年次変動の確認を期待したい。 ・近年の異常気象により、計画どおりに野菜が育たないことで困っている農家の方も多いと思う。それぞれの野菜にあった栽培技術が確立され、安定供給されることを望む。 ・温暖化に対抗する施設野菜の安定生産に向けての技術開発は、昨今の気象状況を踏まえると早急に望まれる課題である。その中で、「トマトのプランターによる密植養液隔離栽培」では、連作による影響が出ないという実証結果は大変興味深い。引き続き研究いただくことを期待している。 ・気候変動が極端な日が増え、農家としても工夫が必要になってきた。斬新な考え方が必要なので大学等教育機関と連携した研究がより多くできると新しい発見があるのではないかと 思った。				
	イチゴを中心とした需要動向の調査と生産コスト低減の検討	4.0	3.4	3.2	10.6
	・イチゴは奈良県の重要農作物であり、新規就農者も多く、人気の品目であるため、その生産コスト低減や適正な価格設定などは重要な課題である。今回、古都華の価格受容性に関して適正な価格設定の余地があることが示され、興味深い。今後は、大阪や東京などの大都市圏や、一般消費者だけでなく、外食業者や加工業者などへの調査も期待したい。生産コスト低減に向けた調査も重要な内容であるが、今後は、この研究の出口戦略（どのように普及・啓蒙させるか）も要検討。 ・イチゴの新規就農者が多くなっていることはよく耳にする。生産者と消費者の理想価格が合致することはないと思うが、どちらも納得のいく価格帯を目指してほしい。 ・まほろばキッチン樫原店での古都華の価格受容性調査で、生産者設定価格と消費者理想価格との価格差が見受けられた。高すぎたり安すぎることがないような適正価格で販売できるようすべきである。興味深い内容なので、引き続き調査・提案いただきたい。 ・他県のリース活用のお話を聞いて、奈良県にも協力体制があればうれしい。イチゴは、最近増えすぎていないか。農業的に奈良での農作物を俯瞰で見られる人が必要だと実感している。				
	ナスうどんこ病に対する有効薬剤の探索と防除の省力化	4.4	3.8	4.0	12.2
	・奈良県でのナスは重要な作物であり、ナスうどんこ病菌対策は重要な課題である。これまでに県内の菌種の同定に成功した点は評価できる。また今年度は、有効な薬剤を複数見いだせたことや、くん煙の効果も確認できた点は評価できる。今後は田原本菌株での効果の検証を経て情報提供や普及を期待したい。 ・ナスうどんこ病に効果の高い薬剤がわかれば農家の方の苦労も軽減されることだろう。計画のとおりに進むことを期待している。 ・ナスうどんこ病をいかに対策するかというのは、ナス生産者にとって重要課題である。薬剤によっては耐性菌も出てきているので、引き続き、地域をまたがった調査と省力的な防除技術の開発を期待している。頑張ってください。 ・マニュアル化が進み、後継者とのつながりができることを期待している。				
	野菜類のアザミウマ類等に対する農薬代替技術の開発	4.8	4.0	4.0	12.8
	・天敵製剤や物理的防除法などの農薬を使用しない防除法の確立は重要な課題である。昨年度と同様に、天敵による高い防除効果が確認でき、再現性が確認できた点は評価できる。赤色ネット資材の有効性は継続的に解析が必要である。今後はこれらの得られた成果をマニュアル化し、普及へと進めて頂きたい。 ・農薬代替技術として用いられている天敵製剤にはとても評価し期待している。赤色ネットが普及する日を期待している。 ・アザミウマ類の害虫に対し農薬に代わる対処技術として、天敵製剤や防虫ネットの利用など様々な代替技術の実証実験を行っていただいている。防除効果が安定するよう、更なる研究・開発を期待する。 ・マニュアル化が進み、後継者とのつながりができることを期待している。				

重点目標	研究課題	評価区分			合計
		課題設定 平均	手法の妥当性 平均	達成状況 平均	
評価委員の意見					
大規模産地の継続的な発展を支える	新たなカキ品種の育成	5.0	4.0	4.0	13.0
	・カキはイチゴとともに重要な県産農作物であるので、非常に重要な課題である。これまでの取り組みが実を結び、果実が大きい有望系統が得られた。複数年度のデータ収集に基づいて、令和8年度の品種登録出願に向けて引き続き検討を進めて頂きたい。また、現場ニーズのある甘柿の育成・選抜も楽しみである。 ・新たなカキ有望系統はリンゴサイズと大きく糖度が高くとても興味がある。一方で若い世代のカキ離れも不安の種である。今後は若い世代へのプロモーションも必要かもしれない。 ・新しいカキ有望系統は大玉であり糖度も高いとのことなので大変興味深い。今後は、さらなる栽培技術の確立と、甘柿の奈良県独自品種開発にも期待している。 ・富有柿が優秀すぎる品種なので甘柿は次世代に喜ばれる品種ができる事に期待している。「御所柿」というルーツを奈良として残したい気持ちはとてもわかるので期待して待っている。研究員の人手不足がないか心配。				
	キク白さび病の感染環を断ち切る技術体系の確立	5.0	3.4	3.8	12.2
	・小ギクなどのキクは本県の重要な栽培品目であり、その収益性の低下をもたらす白さび病の防除は重要な課題である。高温処理技術やUV-Bの利用などの新しい技術の有効性が明らかになり、評価できる。抵抗性系統の育成も着実に進んでいると評価できる。マニュアル化や普及に向けて引き続き検討をお願いする。 ・キクは奈良県を代表する植物であり、白さび病対策は必須になる。UVランプや高温処理技術などの調査を進めていただき最終目標に到達することを期待する。 ・白さび病の感染の連鎖を断ち切る技術体系の確立は、キク生産者にとって重要な課題である。課題設定にある穂や苗の高温処理やUV-Bランプ、抵抗性のある系統の育成など対策として非常に興味深い。効果のある結果も出てきているので、引き続きの研究を期待している。 ・UVランプの効力が目覚ましい。補助などあれば理屈的には効果が高いので、利用が増えるのではないかなと思う。				
将来の環境変化に対応する	温暖化に適応した果樹新規品目の栽培適性調査	4.6	3.6	3.6	11.8
	・温暖化に適応した新規な果樹の栽培適正試験を行う課題であり、長期的な視点での意義・重要性が認められる課題である。アボカドや中晩柑にフォーカスして施肥量の効果など、一定の成果が出ている。引き続き、マニュアル化を目指してスピードアップを期待したい。 ・奈良県産のアボカドはとても興味がある。是非、引き続き研究を進めていただきたい。需要は高いと思うので、栽培方法が確立されると生産者が増えると思う。 ・ハウス栽培環境下での温暖化に適応した果樹新規品目の栽培適性調査はとても興味深い。環境に適応できる果樹は限定されるが、市場での需要や収益性、栽培し易さも考慮して、幅広い品種の実証実験を繰り返しながら進めていただきたい。 ・農家的には栽培品目を変えるというのにはとても勇気のいる決断が必要です。部会が作れるくらい何かの作物に特化して生産できる様に今後も調査を続けてほしい。				
	食品残渣等の未利用資源の特性把握	4.6	4.2	3.6	12.4
	・食品残渣の有効利用はSDGsの観点からも重要な課題である。県内で発生し、農業資源として有効に使用可能な残渣資源が想定よりも少なかった点は残念ではあるが、米ぬかの化学肥料代替資材としての検討は興味深く、フィチン酸からのリンの可給化に期待したい。また、柿の剪定枝のバイオ炭への応用も奈良県ならではの着眼点といえる。Jクレジットなどの試算を経て、収益性の確認も期待したい。 ・環境問題の観点からもこの取り組みは評価する。多少達成が遅れたとしても長い目で取り組んでいただきたいと思う。 ・食品残渣等未利用資源問題はSDGsを実行していく上で重要な課題である。特に、米生産で発生する「もみ殻」と「米ぬか」の有効活用は大変興味深い。「米ぬか」が化学肥料の代替資材となれば素晴らしいと思う。引き続き研究いただくことを期待している。 ・未利用資源の活用マニュアルに期待している。バイオ炭の作成は興味があるが、昨今山火事が懸念される為、安全な方法も考えつつ、すすめたいと思う。				

9. 共同研究・受託研究(外部資金研究)・委託研究の実施状況

事業名	共同・受託・委託研究 課題名	研究 期間	代表機関 (委託元)	共同研究 機関
民間受託試験	熱融着性ポリエステル繊維固化ポットレス培地のイチゴ育苗資材としての適応性評価	R6～R7	みのる産業 (株)	-
民間受託試験	ヒートポンプと利用したイチゴの生産性向上	R7～	(株) イーズ	-
イチゴ育成系統評価試験	イチゴ有望系統の特性検定試験	R5～	農研機構 九沖農研	-
イチゴ育成系統評価試験	イチゴ有望2系統の育成系統評価試験	R6～R7	農研機構 野花研	-
食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクトのうち食料安全保障強化に資する新品種開発	国内生産力強化のための多収性、低窒素要求性、病害虫抵抗性野菜品種の開発	R5～R7	農研機構	岩手県、新潟県、埼玉県、群馬県、千葉県、愛知県、三重県、奈良県、京都府、佐賀県、カネコ種苗(株)、(株) 渡辺採種場、朝日アグリア(株)
オープンイノベーション研究・実用化推進事業	スマートポリネーター監視システムで活動把握！適材適所なポリネーター投入によるイチゴ高収益生産の実現	R5～R9	徳島県	三重県、岡山大学、近畿大学、(株) アイエスイー
農地土壌炭素貯留等基礎調査事業	農地管理実態調査	H25～	農林水産省 近畿農政局	-
茶の系統適応性・特性検定試験	茶樹の新規育成系統における産地適性の検討	H27～	農研機構 果茶研	農研機構 果茶研ほか
みどりの食料システム戦略実現技術開発・実証事業のうち農林水産研究の推進	植物遺伝資源の収集・保存・提供の促進	R1～	農研機構 遺伝資源セ	弘前大学、信州大学、東京農業大学、岡山大学、愛知県ほか
農薬残留対策総合調査	河川中農薬モニタリング調査	R3～	(株) エスコ	-
革新的新品種開発加速化緊急対策	政策ニーズに対応した革新的新品種開発(耐暑性に優れるダリアの開発)	R7～	農研機構	農研機構、秋田県、山形県、長野県、高知県、宮崎県
マーケットイン輸出ビジネス拡大緊急支援事業のうち品目団体輸出力強化緊急支援事業	輸出力増強のための新規農産物の残留リスク評価と総合的国内利用体制の確立に向けた調査研究	R5～R7	日本茶業 中央会	農研機構 植物防疫 研究部門ほか
戦略的スマート農業技術の開発・改良	中山間地の分散型園地におけるカキの省力・高品質生産のための通信新規格による双方向制御システムの開発	R5～R7	近畿大学	(株) アズマ、五條吉野土地改良区、(株) 堀内果実園、旭ヶ丘農業生産販売協同組合
持続的生産強化対策事業のうちジャパンフラワー強化プロジェクト推進	・異常気象および酷暑対策に資する計画生産/産地連携および環境調節技術の実証 ・特異需要期安定供給および物流問題対策に資する収穫後鮮度・品質保持/低温保管技術の実証	R7	農研機構	コンソーシアム参画機関数21
新農薬等実用化事業	奈良県植物防疫協会新農薬等実用化試験	R7	県植防	病害虫防除所

Ⅲ 職員の受賞

表彰の名称 (表彰年月日)	受賞者名	受賞課題名
令和7年度全国農業関係 試験研究場所長会研究 功労者表彰 (2025. 6. 24)	仲 照史	キクおよびダリアの省力安定生産技術の開発

Ⅳ センター主催・共催の会議・研修会・講習会

名称	目的	年月日	内容	参集範囲
イチゴの栽培管理技術 に関する意見交換会	府県試験研究 員間の意見交 換	2025. 10 . 17	イチゴの栽培管理技術に関する研究 内容の発表及び意見交換	(地独) 大阪府立 環境農林水産総合 研究所

V 講習会・研修会での講師活動

講師名	講義内容・講演テーマ	講習会等の名称	講習対象者	開催場所	年月日
小林幹生	「なら酒1504」の育成	奈良県産新酒造好適米「奈々露」を使った新酒お披露目会	一般者	奈良ホテル	2025. 4. 5
谷河明日香	茶（茶摘み実習・茶工場見学）	なら農と食の魅力創造国際大学 校アグリマネジメント学科 専門実習	1年次学生	大和茶研究センター	2025. 5. 16
浅野俊介	病害虫防除Ⅰ	令和7年度アグリスタートアップ研修	研修受講生	NAFIC池之内校舎	2025. 5. 28
竹中 勲	農薬の安全使用Ⅰ	令和7年度アグリスタートアップ研修	研修受講生	NAFIC池之内校舎	2025. 5. 28
神川 諭	イチゴの本圃および育苗圃の管理	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（野菜）	普及指導員	農業研究開発センターほ場	2025. 6. 10
竹中 勲	病害虫防除Ⅱ	令和7年度アグリスタートアップ研修	研修受講生	NAFIC池之内校舎	2025. 6. 18
藤森颯太	農薬の安全使用Ⅱ	令和7年度アグリスタートアップ研修	研修受講生	NAFIC池之内校舎	2025. 6. 18
神川 諭 辰巳嘉人	・ハウス内環境のリアルタイムモニタリングと環境制御 ・促成栽培イチゴにおける複合環境制御	五條・吉野いちご研究会 勉強会	県内生産者	交流・サロン棟	2025. 6. 19
虎太有里	奈良県の花き生産の現状と研究の取り組みについて	奈良県農産物生産流通部会花き部会研修会	生産者	JAならけん新庄営農経済センター	2025. 6. 19
長山進也	土壌診断	普及指導員研修（県段階）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 6. 24
小林幹生	「なら酒1504」の育成	酒造好適米新品種「なら酒1504」および「奈々露」のPRイベント	一般者	奈良まほろば館	2025. 6. 28
小林幹生	水稻（田植え）	なら農と食の魅力創造国際大学 校アグリマネジメント学科 専門実習	1年次学生	NAFIC池之内校舎	2025. 6. 7
竹中 勲	病害虫の診断と防除技術 虫害	普及職員研修「新任者基礎研修」	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 7. 1
浅野俊介	病害虫の診断と防除技術 病害	普及職員研修「新任者基礎研修」	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 7. 1
藤森颯太	天敵利用技術と農薬代替技術	普及職員農政課題研修（天敵利用）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 7. 2

講師名	講義内容・講演テーマ	講習会等の名称	講習対象者	開催場所	年月日
長山進也	現場で役に立つ土壌診断	普及指導員研修（県段階）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 7. 3
竹中 勲	有機農業での害虫防除技術	普及職員農政課題研修（有機農業）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 7. 3
竹中 勲	病害虫発生予察調査と病害虫防除について	奈良県病害虫防除員研修会	病害虫防除員	交流・サロン棟	2025. 7. 10
小林幹生	水稻の育苗・雑草管理 小麦の奨励品種特性について	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（作物）	普及指導員 作物担当	交流・サロン棟	2025. 7. 11
小林幹生	水稻（幼穂形成状況の確認）	なら農と食の魅力創造国際大学 校アグリマネジメント学科 専門実習	1年次学生	NAFIC池之内校舎	2025. 7. 11
防除所員	水稻・野菜の病害虫の現場診断について	普及職員研修「新任者基礎研修」	普及指導員	現地巡回	2025. 7. 17 2025. 7. 23 2025. 8. 19
平 浩一郎 倉田 淳	主要果樹の病害虫の観察	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修、強化研修（果樹）	普及指導員	現地ほ場	2025. 7. 24, 8. 22, 9. 18
辰巳嘉人	イチゴ輸送の現状と「傷み」の軽減に向けた試み	令和7年度 イチゴ販売力強化セミナー	県内生産者	橿原総合庁舎	2025. 7. 25
小林幹生	高温登熟障害耐性品種現地実証	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（作物）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 7. 31
神川 諭	園芸施設に関する基礎知識	普及指導員研修（県段階） 新任者基礎研修	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 8. 6
竹中 勲	農業に関する基礎知識・農業散布の実際	普及職員研修「新任者基礎研修」	普及指導員	農業研究開発センター ほ場等	2025. 8. 8
小林幹生	水稻の水管理、施肥管理について	普及指導員研修（県段階） 専門技術強化研修（作物）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 8. 14
小林幹生	「なら酒1504」の育成	第13回奈良まほろば産学官連携懇話会	近畿大学学生	近畿大学	2025. 8. 29
神川 諭	‘奈乃華’の心止まり対策について	‘奈乃華’の栽培講習会	奈良県農業協同組合員	交流・サロン棟	2025. 9. 3
小林幹生	奈良県小麦の変遷、「はるみずき」の特徴および栽培方法	古都麦収穫報告会	一般者	ノホテル奈良	2025. 9. 5
辻本誠幸	カキの加工・脱渋等について	なら食と農の魅力創造国際大学 校アグリマネジメント学科講義	2年次学生	NAFIC池之内校舎	2025. 9. 11
神川 諭 佐野太郎 辰巳嘉人 田中聡馬	イチゴの歴史と育種の実際（座学） イチゴの花芽検鏡（座学・実習）	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（野菜）	普及指導員	交流・サロン棟 農業研究開発センター	2025. 9. 15

講師名	講義内容・講演テーマ	講習会等の名称	講習対象者	開催場所	年月日
竹中 勲	農薬の安全使用	なら食と農の魅力創造国際大学 校アグリマネジメント学科講義	2年次学生	NAFIC池之内校舎	2025. 9. 25
谷河明日香	茶（茶栽培・茶工場見学）	なら農と食の魅力創造国際大学 校フードクリエイティブ学科 専門実習	1年次学生	大和茶研究センター	2025. 9. 26
谷河明日香	大和茶の歴史とこれからの大和茶の 生産振興について	第3回中曽司の挽き茶会体験会	特定非営利活動法人 奈良の食文化 研究会会員	橿原市中曽司町本町会館	2025. 9. 28
小林幹生	「はるみずき」の安定多収栽培	小麦の栽培講習	多集落営農組合	多自治会館	2025. 10. 2
石川 道夫	奈良の柿の産地紹介および柿の品種 について	奈良の柿フェア	首都圏消費者	奈良まほろば館	2025. 10. 4
森岡 正	大和野菜研究センターの研究成果の 紹介および軟弱野菜栽培実習	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（野菜）	普及指導員	大和野菜研究センター	2025. 10. 15
虎太有里	切り枝花木、主な鉢花・花壇苗の生 理生態と栽培技術	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（花き）	普及指導員 花き担当	交流・サロン棟	2025. 10. 20
小林幹生	高温条件における奈良県水稻の現状 と対策	土地改良区技術実践向上研修会	奈良県土地改良区 連合会	大和平野土地改良区	2025. 10. 30
辻本直樹	キク育種の実際、花きの開花調節と 光源選択	普及指導員研修（県段階） 専門技術強化研修（花き）	普及指導員	交流・サロン棟	2025. 10. 30
仲 照史	第一次産業分野からのオープンイノ ベーションへ～知的財産と産学官 連携研究～	知的財産セミナー	県内企業経営者	産業振興総合センター	2025. 12. 19
平 浩一郎 倉田 淳	カメムシの越冬調査	普及指導員研修（県段階） 専門技術基礎研修（果樹）	普及指導員	現地ほ場および果樹・薬 草研究センター	2026. 1. 13, 1. 21
藤森颯太	害虫の発生状況と防除技術	奈良県農薬管理指導士更新研修	農薬管理指導士	交流・サロン棟	2026. 1. 16
浅野俊介	病害の発生状況と防除技術	奈良県農薬管理指導士更新研修	農薬管理指導士	交流・サロン棟	2026. 1. 16
小林幹生	高温条件における奈良県水稻の現状 と対策	県政出前トーク	特定非営利活動法人 サークルおてんとさん	奈良県コンベンションセ ンター	2026. 1. 25
佐野太郎	トウガラシ「HC3-6-10-11（呼称： やまと甘なんばん）」について	日本種苗協会奈良県支部技術研 究部会セミナー	奈良県支部員	交流・サロン棟	2026. 2. 18
藤森颯太	キュウリ黄化えそ病対策と天敵を利用 した害虫防除体系について	キュウリ病害虫対策講習会	南部管内抑制キュ ウリ生産者	果樹・薬草研究センター	2026. 2. 20
谷河明日香	茶（茶加工手揉み実習）	なら農と食の魅力創造国際大学 校アグリマネジメント学科 専門実習	1年次学生	大和茶研究センター	2026. 2. 4

講師名	講義内容・講演テーマ	講習会等の名称	講習対象者	開催場所	年月日
北條雅也	農薬の一般知識	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 5
北條雅也	農薬のリスクと安全性評価	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 5
井村岳男	植物防疫の一般知識	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 5
小林幹生	農作物の雑草防除	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 6
井村岳男	農薬の安全・適正使用	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 6
藤森颯太	農作物の虫害	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 6
浅野俊介	農作物の病害	奈良県農薬管理指導士養成研修	農薬管理指導士 受講者	交流・サロン棟	2026. 2. 6
小林幹生	水稻の登熟歩合測定、玄米品質	普及指導員研修（県段階） 専門技術強化研修（作物）	普及指導員 作物担当	交流・サロン棟	2026. 2. 9
平 浩一郎	薬用作物関連試験研究の紹介および ヤマトトウキの湯もみについて	普及指導員研修（県段階）	普及指導員	果樹・薬草研究センター	2026. 2. 9
神川諭	奈良のイチゴ	八百屋塾	東京都青果物商業 協同組合	WE B	2026. 2. 15
東井君枝	奈良のイチゴの歴史・品種開発	奈良県産イチゴのプロモーション セミナー	一般	奈良まほろば館	2026. 2. 22
東井君枝	奈良のイチゴの歴史・品種開発	関西食ビジネス研究会例会	関西食ビジネス研 究会員	堂島ビルヂング	2026. 2. 24
梨原嵩司	有機栽培に関する研究紹介	全国茶品評会出品茶審査会上位 入賞に向けた研修会	県内茶生産者	JAならけん広域茶流通セ ンター	2026. 3. 6
浅野峻介	今年度問題となった病害虫とその対 策及び農薬安全使用について	農薬安全使用研修会	農薬取扱者、 農薬管理指導士等	交流・サロン棟	2026. 3. 6
小林幹生	高温条件における奈良県水稻の現状 と対策	多集落営農組合研修会	多集落営農組合	多自治会館	2026. 3. 15

VI 研究交流

1. 職員が受けた研修

研修課題・研修名	研修期間	派遣場所 (研修場所)	人数 (人)
兵庫県における病害虫発生予察調査	2025.4.8	兵庫県立農林水産技術総合センター 淡路農業技術センター	1
農林水産関係研究リーダー研修	2025.6.12～13	中央合同庁舎	1
農研機構技術講習	2025.6.16～20	農研機構 植物防疫研究部門 果樹茶病害虫防除研究領域	1
令和7年度農家研修	2025.7.4, 10.2, 2026.2.4	上平氏 柿園地	1
種子繁殖性イチゴ新品種育成に向けた 系統育成手法の習得	2025.7.21～3.30	農研機構 安濃野菜研究拠点	1
令和7年度中央畜産技術研修会 (畜産環境保全(耕畜連携、堆肥利用促進))	2025.9.24～26	独立行政法人 家畜改良センター 中央畜産研修施設	1
2025年度残留農薬分析入門セミナー受講	2025.9.27	日本植物防疫協会	1
農林水産研究における知財マネジメント事業 ネットワーク会合	2025.10.5 2026.1.16	東京駅カンファレンスセンター	1
令和7年度農地土壌炭素貯留等基礎調査事業のうち 「農地管理実態調査」・令和6年度国内資源の肥料利用 拡大に向けた調査事業 土壌調査法講習会	2025.10.9～10	農研機構	1
第三種放射線取扱責任者講習会	2025.10.16～17	大阪科学技術センター	1
イチゴの輸送、貯蔵試験における測定手法の習得 振動試験機による評価手法の習得 落下試験機を用いた包装資材の検討 予冷が果実品質に及ぼす影響を検討	2025.10.16～2026.3.31 うち約13日間	農研機構 食品流通・安全研究領域 流通技術・新用途開発グループ	1
令和7年度中央畜産技術研修会 (畜産環境保全(堆肥化処理、利用技術))	2025.12.1～5	独立行政法人 家畜改良センター 中央畜産研修施設	1
令和7年度葛根掘り・葛粉加工に関する 現地視察研修会	2026.1.23～24	鹿児島県鹿屋市	1

2. 所が受け入れた技術交流者・研修

研修課題・研修名	研修期間	人数 (人)
県教育研究所インターンシップ	2025. 8. 5～6	2
県庁インターンシップ（技術職）	2025. 8. 18～21, 9. 2～5, 9. 22～26	5
県障害福祉課障害者職場実習	2025. 12. 15～17	2

Ⅵ 視察・見学の受け入れ

担当		件数(件)	人数 (人)
研究 開発部	栽培・流通科、環境科	14	100
	果樹・薬草研究センター	17	321
	大和茶研究センター	16	911
	大和野菜研究センター	14	71
研究 企画推進部	研究企画推進課	9	137
計		70	1540

VII 一般報告

1. 所在地と規模

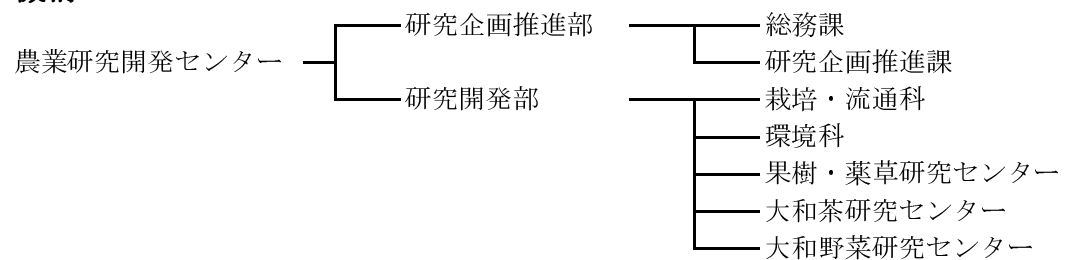
1) 所在地

区分	所在地	〒	TEL
本所	桜井市池之内130番地-1	633-0046	0744-47-4491(代)
果樹・薬草研究センター	五條市西吉野町湯塩1345番地	637-0105	0747-24-0061
大和茶研究センター	奈良市矢田原町乙470番地-1	630-2166	0742-81-0019
大和野菜研究センター	宇陀市榛原三宮寺125番地	633-0227	0745-82-2340

2) 規模 (令和8年3月31日現在)

区分	土地面積(m ²)	棟数(棟)	建物面積(m ²)
本所(なら食と農の魅力創造国際大学校池之内校舎を含む)	98,362	21	6,256.00
果樹・薬草研究センター	66,506	11	2,311.05
大和茶研究センター	20,760	10	1,448.71
大和野菜研究センター	51,220	15	2,086.95
計	236,848	57	12,102.71

2. 機構



3. 職員数

(令和8年3月31日現在)

区分	所長	部長	研究センター・科長・所長	総括研究員	副主幹・係長・	指導研究員・主査・	主任研究員	技師補	主任主事・	主事	総括技能員	指導技能員	主任技能員・業務員・(事務・その他)	会計年度任用職員(技)	会計年度任用職員	計
全般	1	2														3
総務課				1	1								1	2		5
研究企画推進課			1	1	1								1			4
栽培・流通科			1	3	1	2	2	1				5	2		4	21
環境科			1	2		2	1	1					1	2		10
果樹・薬草研究センター			1	1	1	2		1				1		3	4	14
大和茶研究センター			1	1		1	1						1	1	2	8
大和野菜研究センター			1	1		1	1	1				1	1	1	3	11
計	1	2	6	10	4	8	5	4	0	7	4	8	17			76

4. 業務分担

【総務課】

庶務一般・予算・決算及び会計経理に関すること
土地建物等の管理に関すること

【研究企画推進課】

研究課題の企画調整、研究成果の公表に関すること
農業経営の調査及び試験研究に関すること

【栽培・流通科】

野菜・花き・作物の品種改良・栽培技術に関する試験研究

【環境科】

土壌の調査と土壌・水質管理・農薬の安全使用に関する試験研究
農作物の病害虫の発生生態及び防除法開発に関する試験研究

【果樹・薬草研究センター】

果樹・薬草の品種改良・栽培技術に関する試験研究

【大和茶研究センター】

茶の栽培・加工ならびに高品質茶生産に関する試験研究

【大和野菜研究センター】

大和高原地域における特産物の開発育成に関する試験研究
ジーンバンクの運営管理
優良種子の保存と活用

Ⅷ 気象表(本所[桜井市])

年	月	半旬	各気温の半旬平均値(℃)						降水量 (mm)		合計全天日射量 (MJ/㎡)	
			日最高		日最低		平均					
			本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年		
2025	4	1	16.7	18.8	3.9	5.2	10.5	12.0	1.0	9.5	77.7	86.0
	4	2	22.1	20.2	6.3	6.6	13.9	13.4	11.0	17.2	101.7	87.9
	4	3	19.7	20.9	6.6	7.4	12.7	14.1	18.5	17.8	81.0	84.7
	4	4	25.4	22.0	10.0	9.1	17.8	15.6	0.0	13.7	100.5	83.5
	4	5	24.4	23.1	10.9	9.9	17.6	16.3	11.5	12.7	87.8	88.0
	4	6	23.4	22.5	5.7	8.9	14.6	15.8	19.5	23.8	117.8	88.3
2025	5	1	24.1	24.3	7.7	9.7	16.6	17.1	23.5	10.7	106.3	107.9
	5	2	23.8	23.7	10.4	10.3	16.5	17.0	52.5	30.1	84.1	87.3
	5	3	25.7	25.6	12.1	11.9	18.4	18.5	10.5	33.7	112.8	96.0
	5	4	27.9	26.2	16.7	14.2	22.0	19.9	15.5	23.4	76.0	87.2
	5	5	26.9	27.4	17.3	13.8	21.1	20.3	43.0	17.8	66.7	102.5
	5	6	24.1	28.0	14.5	15.0	18.8	21.2	0.0	36.7	80.6	110.5
2025	6	1	26.0	27.9	13.4	14.2	19.7	20.7	37.5	34.2	96.7	110.6
	6	2	27.7	28.0	16.8	16.1	21.6	21.6	51.0	30.1	63.6	89.7
	6	3	27.8	28.1	19.1	17.5	23.0	22.3	50.0	23.9	62.8	83.1
	6	4	35.5	29.4	20.6	17.6	27.6	23.1	0.5	37.3	133.0	99.4
	6	5	32.6	30.4	22.5	19.3	26.7	24.2	33.0	30.6	95.6	92.8
	6	6	33.1	31.2	20.9	21.1	26.7	25.7	48.0	33.2	120.5	84.4
2025	7	1	35.9	31.6	23.4	22.4	28.8	26.3	0.0	37.4	116.0	80.2
	7	2	37.0	32.4	23.6	22.4	29.4	26.5	0.0	56.6	112.5	84.0
	7	3	35.9	32.0	23.1	22.4	28.3	26.4	10.0	30.2	106.5	82.5
	7	4	33.7	34.0	22.0	22.6	27.4	27.6	31.5	22.1	101.4	105.9
	7	5	37.3	35.3	24.3	23.0	29.8	28.4	0.0	12.2	136.2	111.2
	7	6	38.9	35.6	23.0	23.6	29.8	28.7	5.5	25.2	158.2	128.8
2025	8	1	38.1	36.7	24.0	23.6	30.4	29.2	2.5	17.8	117.2	115.9
	8	2	33.7	34.9	24.6	24.0	28.9	28.7	8.5	12.6	83.0	97.7
	8	3	35.2	34.6	24.5	24.0	29.2	28.5	10.0	39.3	85.8	89.6
	8	4	37.0	33.9	24.0	22.8	29.8	27.6	0.0	27.7	118.2	90.2
	8	5	37.3	35.2	24.4	23.8	29.8	28.4	3.5	23.5	107.3	94.4
	8	6	37.5	34.3	23.6	22.4	29.9	27.4	0.0	28.3	132.7	109.5
2025	9	1	35.1	32.7	24.0	21.6	28.6	26.2	70.5	31.7	84.1	81.8
	9	2	35.9	32.4	22.8	21.3	28.1	25.7	0.0	21.9	102.1	77.4
	9	3	33.6	31.2	23.8	21.2	27.6	25.3	17.5	23.6	74.0	73.4
	9	4	33.6	30.7	22.7	20.7	27.5	25.0	24.0	27.5	83.3	66.8
	9	5	29.7	28.5	18.9	18.2	23.8	22.7	6.5	20.8	69.1	64.5
	9	6	29.2	28.7	17.7	17.7	23.3	22.5	16.0	23.3	68.4	65.1

年	月	半旬	各気温の半旬平均値(℃)						降水量 (mm)		合計全天日射量 (MJ/m ²)	
			日最高		日最低		平均		本年	平年	本年	平年
			本年	平年	本年	平年	本年	平年				
2025	10	1	26.8	27.6	18.2	16.4	21.7	21.4	17.0	15.2	50.0	61.5
	10	2	29.0	25.9	17.4	15.2	22.7	20.0	0.0	30.8	72.7	57.5
	10	3	28.1	24.8	18.3	14.3	22.7	18.9	12.0	17.2	46.8	57.9
	10	4	26.6	23.3	16.8	13.0	20.9	17.6	24.5	20.7	47.3	52.1
	10	5	20.1	21.3	10.6	10.6	14.7	15.5	9.5	50.8	45.1	51.0
	10	6	19.9	21.0	9.0	8.9	13.9	14.4	37.0	17.4	59.9	66.2
2025	11	1	18.0	20.9	8.3	8.0	13.4	13.7	4.5	12.0	38.9	58.0
	11	2	19.2	19.7	7.7	7.5	13.2	13.2	12.0	14.8	45.2	50.0
	11	3	18.4	18.2	6.0	6.3	11.0	11.8	0.0	5.9	51.0	45.0
	11	4	17.0	17.4	3.9	6.0	10.2	11.4	0.0	9.9	54.3	44.9
	11	5	17.6	16.1	4.0	4.9	9.7	10.2	10.0	9.2	49.9	41.8
	11	6	17.0	15.5	3.3	4.6	9.4	9.8	7.5	11.4	50.2	37.9
2025	12	1	14.6	14.2	3.3	3.0	9.0	8.3	0.0	7.0	39.4	40.1
	12	2	15.0	13.5	0.4	2.1	6.9	7.4	0.0	3.6	47.3	40.7
	12	3	12.5	12.2	1.9	1.9	7.1	7.0	5.0	8.3	32.2	34.9
	12	4	15.9	11.1	1.0	0.9	7.9	6.0	3.5	7.0	49.9	35.3
	12	5	12.5	11.5	4.3	1.3	8.8	6.2	28.5	15.3	24.2	33.1
	12	6	10.7	10.4	-0.6	0.6	4.9	5.3	0.0	7.5	41.3	40.3
2026	1	1	8.3	9.7	1.0	-0.2	5.0	4.9	0.0	1.0	33.0	38.0
	1	2	11.2	9.2	-2.0	-0.5	4.6	4.4	0.5	9.6	45.8	35.3
	1	3	12.1	9.6	-1.5	-0.6	5.3	4.4	0.0	5.8	39.4	36.4
	1	4	15.5	10.7	-0.3	-0.1	7.3	5.3	0.0	5.3	53.2	40.1
	1	5	5.7	8.5	-1.0	-0.3	2.3	4.1	1.5	10.1	42.8	38.0
	1	6	7.5	9.2	-2.0	-0.6	2.8	4.2	0.0	6.9	45.7	49.2
2026	2	1	10.6	9.5	-3.0	-0.7	4.0	4.3	0.5	9.9	59.0	45.7
	2	2	8.5	8.5	-2.0	-1.1	3.0	3.6	4.0	6.0	36.1	43.5
	2	3	13.4	11.3	1.2	0.4	7.1	5.7	20.0	8.8	55.8	48.7
	2	4	11.8	11.4	-1.7	0.9	4.8	5.9	0.0	7.9	62.4	49.1
	2	5	19.1	11.7	3.4	0.4	11.3	6.0	2.5	10.4	64.2	57.6
	2	6	14.7	12.5	7.8	0.9	11.2	6.6	3.5	6.4	18.5	38.8
2026	3	1	15.1	15.4	3.8	3.0	9.1	9.0	10.5	22.3	62.8	58.3
	3	2	11.7	13.5	0.4	1.3	5.9	7.2	4.5	11.1	64.4	66.2
	3	3	12.6	15.7	-1.0	2.4	5.4	9.2	0.0	12.4	81.2	71.8
	3	4	15.5	15.6	0.2	2.2	8.4	8.8	21.0	19.2	80.1	66.9
	3	5	16.6	16.3	2.0	4.0	9.5	10.2	36.5	21.1	75.2	70.3
	3	6	22.2	18.9	6.7	5.6	14.1	12.0	12.5	26.8	96.8	91.3

- ・本データは、農業研究開発センターにおける研究に利用することを目的として観測したもの
- ・平年値は、本所「桜井市」の2017年9月から2025年3月までのデータを平均したもの
- ・6月5日及び10月18日は電気設備点検、2月20日は観測機器定期点検につき、アメダス(奈良、大宇陀)等の観測値で補完

令和 7 年度 業務年報

発行 奈良県総合研究開発センター

〒633-0046 奈良県桜井市池之内130-1

TEL : 0744-47-4491

FAX : 0744-47-4851

e-mail : nougi-kikaku@office.pref.nara.lg.jp